

平成26年度
第25回 大好きいばらき作文コンクール
入 賞 作 品

茨城県知事賞	(4名)
茨城県議会議長賞	(4名)
茨城県教育委員会教育長賞	(4名)
茨城新聞社長賞	(4名)
大好き いばらき 県民会議 理事長賞 (39名) 小学校低学年の部 小学校高学年の部 中学生の部 高等学校の部	

ふるさとで生き続ける「ぼんづな」

小美玉市立小川小学校 三年 齋^{さい} 藤^{とう} 司^{つか} 紗^さ

わたしの住んでいる地いきでは「ぼんづな」という行事があります。この「ぼんづな」は、とても大事な行事です。この行事をしないと、ご先ぞ様が、おはから自分の家に帰って来られなくなってしまうと言われているからです。

わたしたちの住む地区では、八月十三日の昼に、小学六年生までの子どもたちが集まり、大人たちといっしょに「ぼんづな」を作ります。そして、それをおはかに運びます。夕方になると、その「ぼんづな」にご先ぞ様を乗せて、三十けんほどの家々をまわります。

「じっちゃん、ばっちゃん乗せてきた。ほとけ様を乗せてきた。」

と言いながら、一けん一けんまわるのです。

それらの家の前には、水が入っているバケツが置いてあり、「ぼんづな」の先を水に少しつけます。それを、家のげんかんに、

「ほとけ様、おもらっしょ」

と言いながら水をつけるのです。水をつけ終わったら、次の家へと行き、同じことをくり返します。とても大変ですが、みんなできよう力しながらまわります。

大変だけど、まわった家の人たちからは、たくさん感しゃされます。感しゃされると、「もっとがんばれる」という気持ちが出てきます。

わたしが大人になっても、この行事が続いていると、ご先ぞ様もとてもうれしい気持ちになると思います。

わたしたちの地いきにのこる色々な行事は、それぞれの行事にねがいや意味があるのだと強く思います。だからこそ、それらの行事を受けついでいき、ご先ぞ様とのつながりを大切にし、未来につないでいきたいと思っています。

わたしが大人になっても、この「ぼんづな」がつづいていると、ご先ぞ様もとてもうれしい気持ちになると思います。

いつもありがとう

古河市立下大野小学校 四年 小^お 倉^{ぐら} 将^ま 裕^{ひろ}

毎日、学校が終わって校門を出ると、みまもりたいのおじいちゃんやおばあちゃんがぼく達を待っていてくれます。

「ただいま。」

ぼくは、いつもこうあいさつします。暑い日も寒い日も、雨の降る日も、風の強い日も、ぼくがまだ一年生のある夏の日。暑くて暑くて、家までのきよりがいつもより長く感じて、自転車転がしていたおじいちゃんに、

「もう歩けないよ。乗せていってよ。」

と、だだをこねたことがあります。その時、「がんばって歩こうな。見てごらん。いねはこんなに暑くて

も、じつところえてがんばっているから……。梅雨の雨にたえ、夏の強いひざしにも負けないから、おいしいお米になるんだよ。」

いつもやさしいおじいちゃんが、すごく強いおじいちゃんに見えました。

野菜ができている畑の横を通るときは、それぞれの作物について話をしてくれます。雷様が遠くの方から聞こえてくると、雷様の話をしてくれます。雪が降ると、子どもころの雪遊びの話をしてくれます。給食に出たものを残したことを話すと、戦争のときに食べるものが何もなく大変だった生活の話をしてくれます。

ぼくもおじいちゃん達に、たくさん話をします。学校で友達とけんかした話や先生にほめられたり、しかられたりした話。テニスの大会で賞状をもらった話……。

こんなふうに、ぼくたちはいつもおじいちゃんのみまもりたいのみなさんとたくさん話をしながら帰っています。本当のおじいちゃんやおばあちゃんではないけれど、本当のおじいちゃんやおばあちゃんみたいです。

ぼくは、話をしながら、強く感じる事が二つあります。一つは、みまもりたいのみなさんは、ぼく達のことをとても大切に思ってくれているということです。だから、ぼくも素直に話を聞いたり、話をしたりすることができるとおもいます。

もう一つは、みまもりたいのみなさんは、この生まれ育った茨城のことが大好きだということです。自分達のふるさとをほこりに思い、茨城の自然や文化を守り、ぼく達に伝えて

くれているのだと強く感じます。

ぼくもこの茨城が大好きです。おいしい野菜やお米ができる豊かな土地。カブトムシやクワガタがたくさんいる自然いっぱい林や森。そして、ぼく達を見守ってくれるやさしく、あたたかいおじいちゃんやおばあちゃん。茨城県に生まれてよかったです。

「おじいちゃん、おばあちゃん、いつもありがとう。みなさんが守り伝えてくださっている茨城のよいところを、ぼく達も守り伝えていきます。これからもよろしくお願いします。」

次世代へのかけ橋

稲敷市立江戸崎中学校 二年 穴^{あな}澤^{ざわ}颯^{そう}太^た

「今夜は、豆まきをするからね。」

朝ごはんを食べながら、父にそう言われ、私は、その日が、節分であることに気が付いた。

我が家の豆まきは、まず自宅で豆をまく。その後、マスに豆を入れ、近くの寺社を巡って豆まきをし、最後に水ようかんを買って帰る。そして、家族みんなで、福茶とともに水ようかんを食べるといふものだ。小さい頃から、当たり前のように、私は、毎年、父と豆まきをしてきた。

小学校高学年の頃、町おこしの一環として多くの人に体験をして楽しんでもらおうと企画された「豆まき巡り」が始まった。友達に誘われ、「豆まき巡り」に参加した私は、今まで、毎年行ってきた豆まきが、この地域のちよつと変わった風習

であることを初めて知った。一緒に参加した友達の中には、こんな豆まきは初めてだと話していた人、今まで豆まきをしたことがないという人もいた。私は、毎年、父と行ってきたことだったので、得意そうに、みんなの先頭に立ち、豆まきをして歩いた。

小学生の頃の豆まき巡りは、ただ、楽しんでいただけだった。夕暮れ後、友達と行う豆まきは、肝試しのようでもあり、わくわくした。鬼にふんした大人に、夢中になって豆を投げつけたりもした。しかし、最近では、小さい子の参加が多くなり、中学生になった私は、小さい子の面倒を見ながら豆まき巡りをするようになった。小さい子に、豆のまき方を教えていた私は、自分が父から教えてもらったように、今度は自分が小さい子たちに教えていることに気付いた。そして、このちよつと変わった珍しい風習を守っていこうと、大人たちが豆まき巡りを用意してくれた意味が少しだけ理解できたように思えた。

今年の豆まきは、ちよつと違っていた。いつものように、友達との豆まきをした後、父に誘われ、近くのお寺へと向かった。お寺に到着し、父と本堂へ上がった。本堂の外で、豆まきをしている人の声を聞きながら、私は、住職による護摩焚きに参列した。終了後、節分や豆まきについての話を聞き、最後に、本堂内の豆まきをさせてもらった。とても貴重な体験をさせてもらったとともに、長い年月続けられてきた節分や豆まきを、今までになく、重々しく受け止められたような気がした。

今後、この豆まき巡りには参加しようと思っている。父

のまねをしていただけだった私が、こういった風習を次世代へ残していかなければいけないと思うようになったからである。私は長い年月続けられてきたことを受け継ぐことの大切さを、この豆まき巡りから学ぶことができた。そして、受け継ぐことによって、人と人のつながりや地域のつながりが広がっていくことを感じ始めている。このような気持ちの変化に気付いた時、私は、古い風習が残っている、そして残そうとしているこの地域へ、次第に、誇りを感じるようになっていた。また、大人になって、この地域を離れたとしても、こういった風習に関わっていきたいと思っている。

風習の簡素化や失くしてしまうことはとても簡単であるが、受け継いでいくことは、とても簡単なことではない。それでも人々が守り、受け継いでいくことの意味を知った私は、他に何ができるだろうか。これから、地域の一員としての役割や責任を真剣に考えていきたいと思う。そして、こういった風習を受け継ぎ、次へ伝えていく役目を担っているという自覚をしっかりともち、私は、次世代へのかけ橋となっていきたい。

私の家族と新しい発見

茨城県立下妻第一高等学校 二年 金田

あゆみ 歩

今年の春、八十歳になる祖父が入院した。その日は、祖父と祖母が毎年楽しみにしているツツジを見に行く日だった。私が朝食を食べ終えると、いつもは台所にいるはずの祖父

が、階段を下り、そこに座っていた。しきりに左足をさすっている祖父に「じいちゃん、どうかしたの。」と尋ねると、「痛くも何もないが、動かねえ。そのうち戻る。」と言って、左足を引きずるように椅子に座った。その時は、ちなりと私の頭に浮かんだ「脳梗塞」という病気を、動かしづらいたけならきつと大丈夫だろう、とすぐに打ち消してしまった。

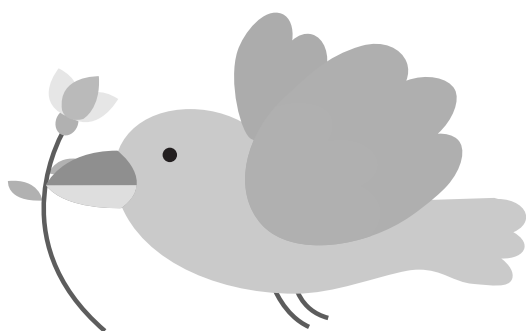
祖父がやはり脳梗塞で入院することになったと聞かされたのは、塾が終わった夜遅くだった。大丈夫なのか、やっぱりそうだったかという思いが混ざってとても不安に感じた。幸い、今朝と症状は変わらず、左足に力が入らないことを除けば、いつも通りの祖父だった。急な入院で、私も家族と一緒に身の回りの物を準備したりお見舞いに行ったりと忙しい日々を過ごした。顔を見せれば、祖父はいつも健康そうで、病院にいても、「今日は地区の集まりがあるから、行つて来い。」と電話までしてくるほどだった。私は、そんないつもと変わらない祖父の様子に安心しながらも、なかなか動かない左足と、それをじれったく思つて無理をしがちな祖父に心配はつきなかった。

祖父の入院から二週間が過ぎた頃、私は、父と祖母と三人で、何度目かのお見舞いに、病院を訪れた。その日は日曜日で、リハビリをやらせてもらえない日だったが、祖父はひとりで自分のベッドの周りをぐるぐると歩く練習をしていた。危なっかしい足どりで、日に焼けた力強い腕でしっかりと手すりを握み一步一步歩く姿を見て、急に胸が熱くなった。「ああ、もうすぐだ。もうすぐ、じいちゃんは帰ってくる。」そんな確信に似た思いを胸に抱き、祖父が歩く練習に付き

添った。ちょうど五週目を終えた時、祖父はゆつくりとベッドに腰を下ろし、大きく息をついた。すると、疲れて横になった祖父の足を、祖母がさすり始めた。小さくて白い、しわくちゃの手に適度に力を込めて、ぐい、ぐいと祖父の左足をさする。私はそれをベッドの端から眺めていた。二人の間に会話は無く、祖母の手が足をさする乾いた音だけが存在していた。ひとさすりに思いを込めるような、祖母の手を通して、祖父の足に力が入っていくように思えるさすり方だった。大好きな祖父母の二人のやりとりは、生まれてからずっと見てきたものだったけれど、こんな二人は初めて見た気がした。二人にとっては何でもないような事なのかもしれないけれど、そこに流れている温かい雰囲気は二人だけの空間を作り出しているように思えた。一歩踏み出せば手が届く距離にいるのに、そこに入るには、いつもと何かが少し違う。同じ家族でも、父や母や兄でも駄目で、家族の中に存在する「夫婦」の絆なのだろうかと思った。

祖父が無事退院すると、今まで通りの生活が戻ってきた。一ヶ月半ぶりの家族全員での食事を楽しみながら、再び祖父と祖母について考えてみた。入院前の変わらない接し方。結婚してから五十年は超えている二人の仲は推し測ることはできない。お互いの性格からくる、ちよつとした言い合いも、大笑いして話すところも、遠くに出かける時もよく目にする事だけれど、あの、一心に足をさする祖母と、何も言わずに身を任せる祖父の姿ほど、絆を感じるものは無いように思う。十七年という、私にしては長い年月の中で初めて気付いた一面だった。家族愛やその絆の中に隠された、固い夫婦の

絆。私には気付くことは難しいのかもしれないけれど、両親にも、きっとそれは存在するのだろう。見つけてみたい気持ちもあれば、探すようなことでもないような気がする。願わくは、それが長い間、薄れないものであってほしい。そして私自身ももしかしたら、いつかそんながりを持てる日が来るのかもしれない。そう思うと、ひとり立ちする前に、自分の家にずっとあった宝物を発見できて良かったと心から思う。



うしをそだてるじいじ

大洗町立大洗小学校 二年 岩城 倫太郎

「モー。」

ごぜん山のじいじの家に行くと、たくさんのおしたちが大きな声でぼくをむかえてくれる。大きなからだに大きな目。そして、じいじのぼく場のまわりは、森で、山がどこまでもつながっていて、すごくきれいなところだ。じいじはこの山の上でうしをいっぱいそだてるぼく場をやっている。

ぼくがすごくおどろいたことがあった。それは、じいじがうしのせわをするためにうしたちにちかづくと、うしたちみんながよろこんでとびはねた。おどっているように大きなからだをうごかした。ぼくにもうしたちがよろこんでいることがよくわかった。じいじに、

「すぐよろこんでいるよ」

というと、

「うしが生まれる時に、赤んぼうをとりあげて、げん気にそだつように、大せつにそだてているから、きつとうしたちはじいじがじぶんたちの親とおなじぐらいに思っているんじゃないかな。」

とじいじはうしのせ中をさすりながら言っていた。じいじは、うしの赤んぼうがぶじに生まれた時のうれしかったこと

や、こうしのうちにびょうきになってしまった時のかわいそうでがつくりしたことを話していた。じいじはうしたちを大せつにこころをこめてそだてているんだなとぼくは思った。

ごぜん山のうしをそだてるしごとは、ひいじいちゃんもそのまえもずっとむかしからつづいているのだそうだ。じいじは、もうすぐ八十さいになる。ずっとむかしからつながっているしごとをしかりとつづけているじいじはかっこいいなと思う。うしのことだったならなんでもしっているじいじがすごいなと思った。また、うしたちにあうためにパパにつれて行ってもらおうと思う。そして、じいじからうしの話を聞きたいと思う。

おもてなしで咲かせる笑顔

筑西市立養蚕小学校 六年 高崎 友萌

「これ。畑ですいかがとれたから、鈴木さんにあげてやって。」

杉山のおじさんが、大きなすいかを持ってきてくれた。

『鈴木』は、祖父の名字だが、杉山のおじさんは、まるであだ名でも呼ぶように、親しみを込めて『鈴木さん』と呼んでくれる。祖父が亡くなって三年たった今でも、初物がとれる度に、こうして届けてくれるのだ。私は、にっこり笑って、

「ありがとうございます。」

と言う。それから、急いで台所へ行き、お茶とお茶菓子を用

意した。

祖父の仏壇に供えるようにと、花を持ってきてくれるおばさんもいる。じゃがいもを持ってきてくれたおばさんは、

「すぐ帰るから。」

と言ったが、私がお茶を入れてあげると、

「せっかくだから、よばれていこうかな。」

と言って、縁側に座った。

お茶を飲みながら、祖母たちのおしゃべりが始まる。

「鈴木さんが、小さいじゃがいもを油で揚げて、甘みそでか
らめて持ってきてくれたんだよ。あれは、うまかったなあ。」

「そう、そう。家にも持ってきてくれたよ。まねして作って
みたんだが、同じ味はなかなか出せなかったよ。」

「一日がかりで作って、いろんな家に持って行って、自分の
家の分は、ほんの味見程度。」

口では文句のようなことを言いながら、笑っている祖母。
きつと、皆が祖父を覚えていて、こうして話をしていること
がうれしいのだ。

生前、祖父は、野菜作りを楽しんでいた。特にナスを作る
のが上手で、

「鈴木さんに、作り方を教わらなくちゃだめかな。」

と言われると、祖父は、うれしそうに、

「野菜に声をかけてやるだけだよ。」

と笑っていた。また、料理も大好きで、上手にできると、い
ろいろな家へ持っていった。

『じいちゃんは、人と人とのつながりを、とても大切にしてい
たんだね。だから、今でも、こうしてつながっているんだ

ね。』

心の中で祖父に語りかけると、祖父の笑顔が見える気がする。
私は、祖父のように、手料理でおもてなしをしてみたく
なった。短時間で作れる物を考えて、私は、厚焼き玉子を作
ることにした。

上手に作るうと、力が入りすぎたようで、ほんの少し形は
くずれたが、味は、とてもよくできあがった。一口食べて、

「おうっ。さすがに、鈴木さんの孫だ。」

と笑う杉山のおじさん。祖母も、

「じいちゃんの味に似てるよ。」

と言って笑った。私も、ずっとにこにこしていた。私は祖父
のように、たくさんの人とつながっていききたいと思う。そし
て、私の料理で、幸せな笑顔をいっぱいにしたいと思う。

新たなスタートに向けて

笠間市立東中学校 二年

水

越

日向子

心が落ち着く木造の校舎。先生を含めた全校生徒の連帯
感。そして笑顔あふれる学級。私の学校の自慢だ。私は二年
前、『こんな学校で三年間過ごせる！』そう思っていた。で
も、そうはいかなかった。

「えっ、統合するって本当？」

私たちが入学して間もない頃、この学校が同じ市内の中学
校と統合することが正式に決まった。

「統合ってなに？」

「この学校に通えなくなるの？」

と、統合の知らせを聞いたときは、よく状況が飲み込めなかった。

統合なんて、もちろん初めての経験だし、親たちも私たちも戸惑った。入学したてで、来年のことなんて想像もできなかった。

私たちの学校、笠間市立東中学校は、祖父母の頃から現在まで続く、歴史ある学校だ。初めの頃は多かった生徒数が、だんだん減少していき、今年はわずか三十一名だ。本当なら入学する一年生が、先を見越して統合先の中学校に入学したせいもある。校舎は周りを山々に囲まれており、季節ごとに変化するその姿はとても美しく、まるで有名旅館からの眺めのような。入学してすぐに、窓から外を見るのがとても楽しみになった。また、田畑もたくさんあり、緑豊かで、やはり農業大国「茨城」に住んでいるのだな、と実感していた。私は、この景色が大好きだ。しかし、卒業までここで過ごしたことはできなくなったので、こんなにも心温まる景色をあと数えるほどしか見られない。とても残念だ。

統合が決まってから、親たちが集まって統合に関する話し合いが何度も行われた。母は、

「他の学校に行っても、あなたたちが不便しないように、楽しい学校生活を送れるように、いろんなことを話し合っているんだよ。」

と言っていた。私たちのために動いてくれていることを知り、とても嬉しかった。そして、

「母さんたちが頑張ってくれているんだから、私たちも私た

ちなりに頑張ろう。」

という気持ちになった。それから、私は今までのマイナスの考えを、変えてみようと思った。

「統合は、自分の視野を広げるチャンス。」

そう思うことにした。東中に通えなくても、新しい学校で新しいスタートを切れればいい。中一と中三で、私たちは二回新たなスタートを切れるチャンスがあり、ラッキーなのでないかと。

たしかに東中ならではのよいところ、自慢したいところはたくさんあるが、新しい学校ではもっともっとたくさんよいところがあるかもしれない。東中で見つけた「東中のよいところ」に負けないくらいたくさんよいところを見つけ出そう。そして、新たな思い出をたくさんつくろうと考えた。

この四月、二年生に進級した。一年生がゼロのこともあり、少し不安な面もあるが、この学校での残された一日一日を大切にしながら過ごしている。体育祭、新人戦、文化祭。一つ一つの行事や出来事に「ラスト」という言葉がついてくる。それに込められた想いを胸に刻み、東中「ラスト」の生徒として、この学校が歴史を閉じる時まで「東中生」ということに誇りを持ち、新たなスタートを切りたいと思う。東中を離れるさびしさや悲しさ、東中での楽しい思い出を、今度は新しい学校で頑張るエネルギーやパワーに変えていきたい。

「ピンチをチャンスに変える」今、私たちにこそできることだと思う。ラストとして、学校が歴史を閉じるということに重みを感じながらも、待ち受ける新たな未来へ向けて、思い

も新たに、一步踏み出す時だ。

来年の今ごろ、笠間中学校の坂を登りながら、笑顔で「おはよう！」とあいさつをしている私たちの姿が、私の目に浮かんできた。

詩吟を通して故郷を思う

茨城県立水戸第三高等学校

一年

平

岡

奈々子

私の故郷である茨城県は、魅力がない県と言われることがあります。私はそうは思いません。なぜなら茨城県は『水戸学』発祥の地だからです。

私の祖母は詩吟の師範で、父は剣舞の師範です。私はその関係で、幼いころから詩吟を吟じたり詩吟で踊ったりしていました。大人のまねをして一番多く吟じたのは『弘道館に梅花を賞す』でした。

中学生になり、初めて漢文を学びました。そこで今まで聴いてきた詩吟の意味を知りました。『弘道館に梅花を賞す』は、弘道館の中にはおよそ千株もの梅の木があります。その梅はいま満開で、清らかな香りがぶんぶんとあたりに漂っています。昔、晋の武帝が学問を好むと梅の花が開き、学問をやめると咲かなくなった故事から、梅を好文木と称するようになったというが、その一面、武の威力が梅にないといえようか。あのきびしい寒中に雪を冒して独り咲き出でて、天下の春のさきがけをなすのは、まさにこの花であるということをおとから本で知りました。

そしてこれは、単なる観梅の詩ではなく、作者自ら企画設計した弘道館の梅が、自分の教えの象徴『水戸学』であることを示していたのです。私の吟じていた『弘道館に梅花を賞す』は、水戸は文武両道をめざす、学びの高い町なのだということを表していたのだということも、改めて感じました。

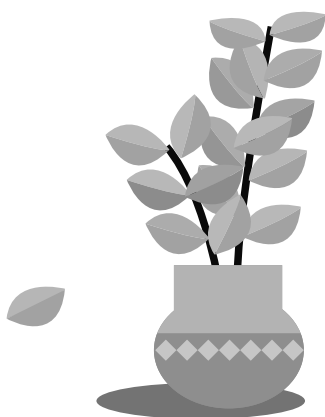
また、中学二年生のときには、桜田門外の変のイベントで剣舞を披露するために、舞台に立つことになりました。その時の詩吟は、水戸藩士である、佐野竹之助作『出郷の作』でした。この詩は、徳川斉昭が、幕府のとがめで幽閉された時に、同士と共に、大老井伊直弼の襲撃を企てたというものでした。

この剣舞で、私は、襲撃を企てた作者の弟役だったので、本番に向けて踊りの練習をしていると、周りのお年寄りの方々が、この詩には、生きて戻ってこれないかもしれない兄への思いが込められているのだということを教えてくれました。また、お年寄りの方々が、水戸をとて誇りに思っていることも感じました。そして、水戸を大切に思うたくさんの方々のおかげで、私は、この詩を深く学び、発表の舞台では、兄を慕う気持ちを精一杯表現することができました。

このようなことから、私は特に茨城県に関する作者が作った詩吟に興味をもつようになりました。それは漢詩の中に、故郷を強く慕う気持ちや、大切にしたいものなどが、込められていると気付いたからです。私は、改めて祖母に詩吟を教えてもらいながら、茨城県に関する作者を探してみました。藤田東湖、斉藤監物、黒沢忠三郎、徳川景山などたくさんいました。水戸黄門で有名な徳川光圀も『日本刀を詠ず』

という詩を作っていました。

中学校では、部活動や高校受験などで忙しく、少し詩吟や剣舞から離れてしまった自分ですが、故郷を愛する故人の思いにふれることができる詩吟を高校生になったこれからもまた続けていきたいと思っています。



だいすき！ みむらのおまつり

石岡市立三村小学校 一年 津賀秋帆

トントコトントン。

こうみんなから、たいこのおとがきこえてきました。

わたしのすんでいるいしおかしみむらでは、まいとし七月におまつりがあります。おまつりにむけて、一カ月まえから、おはやしのれんしゅうがはじまります。おしえてくれるのは、ししれんのおとうさんたちです。

たいこのおとをきいて、みんながこうみんなにあつまってきました。わたしも、一さいのころかられんしゅうにいています。はじめは、タイヤをてきとうにたたいていました。でも、ししれんの人がわたしのてをもつて、たたきかたをおしえてくれたので、だんだんじょうずになってきました。じょうずにたたけるようになります、ほんもののたいこでれんしゅうができます。こしは、わたしもほんもののたいこでれんしゅうができました。はじめてたたいたたいこは、ポンポコポンとてもよいおとがしました。たいこをたたくが、かるくうごいてたたきやすくて、うれしいきもちでした。

おまつりの日。わたしは、あかいおまつりのふくをきて、こうみんなにきました。はじめは、ししのうしろのくる

まにのつっているだけでしたが、一ねんせいもたいこをたたかせてもらえることになりました。ほんばんは、きんちょうしました。じょうずにできてうれしかったです。

二日目のゆうがたは、こうみんなにおみこしがきます。ゆかたにきがえて、おみこしにおまいりをしにきました。みんながおまいりをする、みずうちのおとうさんたちがおみこしをかつぎました。「ワッセ。ワッセ」とかけごえをかけてかつぐおとうさんは、かつこよかったです。

わたしは、おまつりが好きです。だから、いつまでも、みんなでもっていききたいです。

私の大切なじいちゃん

古河市立古河第五小学校 五年 剣持夢有

「げんかんを入れる時はくつをそろえろ。」

「今日は雨がふる、かさを持ったか？ 名札を付けたか？」

ハンカチ、ティッシュは持ったのか？」

「右側を通っていけよ。より道するなよ。」

これは、私達姉弟が登校する朝や、下校時、おじいちゃんが私達に言うセリフです。

「感謝の気持ち、あいさつは忘れるな。」など色々な言葉が飛び出します。

私達は、

「わかったわかった。」

と、てき当に返事をし、かさも持たず、名札も忘れ、

「いつてきまあす。」

と出てきてしまう時があります。

学校へ着き、あつ、忘れた。と気づきますが、そんな時、おじいちゃんの言う事をきちんと聞いておけば良かったと思いますが、おじいちゃんは、忘れ物に気づき、時間があれば、必ず届けてくれたり、下校に合わせお迎えに来てくれていて、雨がふっていてもぬれずに帰れる時がたくさんありました。

私達は、時には、うるさいなあと思うことがあるけれど、どの言葉も、私達が大人になっていく上で、マナーや礼儀としてとても大切なことで、おじいちゃんの愛を感じる言葉ばかりです。

「いいか、良く聞いとけよ。じいちゃんはいつまでもいっしょにいてあげれないから、目の黒い内に、何でも教えとくん。うるさい様だけど、ちゃんと聞くんぞ。」

最近、こんなセリフも多くなりました。それを聞いた母は、

「良い事言うんだから、もう少しやさしい言葉で話してくれればいいのにねえ。命令口調で言うんだから。」

と、不きげんな時がありますが、私は、昔ながらのあらい口調でしか話せない、ぶきようで、はずかしがり屋のおじいちゃんの言葉づかいに、かくれたおじいちゃんのやさしさを感じます。

母に聞くと、仕事をしながらも、今日は、雨がふるけど、かさを持たずに行ったとか、長ぐつではなかったからと早々、仕事を切り上げ、ぐうぜん、学校の前を通ったかの様

にお迎えに来てくれる時もあるそうです。

孫八人のおじいちゃんですが、今日も、自分の体の心配より、私達や、離れてくらす孫の心配ばかりです。

私達が旅行に行く時は、心配そうに見送ります。

父が、

「いくつになっても、子や孫が心配なんだなあ。もう、自分が心配される年令に充分なったのに。」

きつと、そんな毎日の生活が、おじいちゃんの幸せであり長生きのひけつだと思っています。

大好き、茨城と干し芋

ひたちなか市立大島中学校 二年 中村友香

「干し芋」それは私の大好きな食べ物であり、私の住む茨城県の自慢の宝です。その中でも私は特に干し芋が有名なひたちなか市に住んでいます。ひたちなか市にある小学校は、近隣にある小学校とは違い、授業で四年生ごろに干し芋作りを体験します。

小学校では、まず原料となる玉豊の苗を植えるところから始まり、干し芋を乾燥させるまでの全課程を干し芋農家の方に教えていただきながら完成させます。その中で今でも覚えているのは皮むきの作業です。普通のサツマイモと違い、干し芋のサツマイモは蒸すと指で押して潰れてしまうくらいやわらかいので、皮を切るようにむくのではなく、削ぐように

してむくと実がぼろぼろにならずにきれいに皮をむくことができます。それを見ながら自分達で作った干し芋は格別においしく、家族のみんなにも食べてもらいたいと思ったのを覚えています。

また、私の母の友人で実際に干し芋を作っている人がいます。その方は、年中無休でいつも忙しく、なかなか会うことができません。また、春には畑を耕し苗を植えるところから始まり、一つの畑で二十リットルものゴミ袋五個分にもなる害虫を夏に駆除し、干し芋を作る真冬の作業の時には、夜中の三時には起きて仕事を始めるという生活を送っています。本当に大変そうですが、やりがいがあるそうです。また、

「茨城の干し芋はやっぱりおいしいね。」

と、毎年お客様からうれしいおほめの言葉をいただけるので、今も機械に頼らず、全部を手作業で作っているそうです。少しさみしい気もしますが、どこも高齢化のため機械化している所が多くなっているそうです。

こうして出来た干し芋だからこそ「ありがたい」と思い、私は感謝をしながら食べています。

私は、干し芋農家の方々がこうして一年中苦労してやっと作り上げていることを知ってから、ただ、

「おいしいね。」

と、言う方について話をしたくなり、農家の方々の苦労話をしています。そうすると、

「余計おいしく感じるね。」

と、言ってくださり、自分で作っていないのに、自分のことのようにうれしくなってしまう。また、

「学校の行事でやれるなんて幸せだね。」

と、親戚の方に言われたこともあります。そして私はますますうれしくなり、「茨城に生まれて良かったな」と思います。

それから毎年、いろいろな県外に住む父母の知人が、干し芋が届くのを心待ちにしています。こんなおいしい物をすぐ食べられる私はとても幸せです。その人数は年々増えていくように、父母は大変そうですが、みんなが気に入ってくれてうれしそうにしています。そして私達子供には、毎年うれしい特典がやってきます。お礼にいろいろな食べ物や一年中家に届くのです。みなさんその土地で有名な食べ物を送ってくださいます。その日はおいしいものがいただけ、とても幸せな気分になります。やはり、その土地を愛し、喜んでくれる私達を想像しながら送ってくださいているのだと思います。それから昨年には、父の友人が大雨による災害のために、三日間道路が閉鎖してしまった事があり、電気もガスも使えなかった時に保存食である干し芋が役に立ったそうです。父と母も、

「駆け付ける事が出来なかったけど、意外な事でお役に立てて本当に良かった。」

と、喜んでいました。

私はこのような交流を、大人になったらしたいです。そして、干し芋からつながる友人の輪を広げていけたらなと思います。

そのためにも、いつまでも干し芋作りを続けてもらいたいし、応援したいと思います。

茨城県の神社の魅力

茨城県立中央高等学校 二年 柴^{しば}沼^{ぬま}美^み里^{さと}

全四十七都道府県の魅力度ランキング、第四十七位茨城県。茨城県には、もっと注目されるべきスポットがあると私は思います。私は茨城の神社が好きです。他県にもすばらしい神社はたくさんありますが、茨城県の神社はどこか懐かしく、身近に感じることができます。

私の好きな神社をいくつか紹介します。初めに、笠間市にある笠間稲荷神社。笠間稲荷は日本三大稲荷の一つとされ、初詣には八十万人以上の参拝者が訪れます。これは、初詣参拝者数で茨城県一位を誇ります。御朱印を授かるまでの間、巫女さんが話かけてくださり、とても心温まる神社です。近隣に笠間稲荷美術館があり、古陶器の展示、水墨画や花鳥画、香道具等を中心に展示されています。

次に水戸市にある、水戸八幡宮。ここは森の奥にあり空気がとても綺麗なところで、参拝しやすいルートで参拝できる神社です。他の神社では境内をグルグル回って参拝する場合が多いのですが、ここは参拝ルートが決まっており、その通りに進むと帰れるように繋がるので、初めての方でも参拝しやすいのです。また、神社の左側にあるご神木の大銀杏の木が季節だとても美しいのも魅力です。

最後に大洗にある大洗磯前神社。海が目の前で、鳥居から見える海はとても綺麗です。大鳥居をくぐり海に行くと「神磯の鳥居」という海の岩の上に鳥居があります。このように

磯前神社は鳥居の多い神聖な神社です。また境内はとても静かで、時間がゆっくり流れるようにも感じます。

他にも紹介したい神社はたくさんありますが、茨城県には他県に負けないくらい魅力のある神社があります。そこで、さらに茨城の魅力度を上げるために、県内の神社の魅力を発信できたら良いと思います。

茨城の神社は、紹介したように綺麗な神社がたくさんあります。そこで、茨城県中の神社を巡る、神社巡りツアーを開き、外国人観光客を狙います。神社に行くと、外国人の観光客をよく目にします。現在海外では、日本の文化や「日本っぽい」観光スポットが注目されています。神社は日本の伝統的な建造物であり、日本の文化や心を学べる場所です。海外からの観光客を獲得するために、神社巡りツアーを提案します。

またそれと同時に、私たちは外国語の習得に力を入れるべきです。私が参拝しに行ったとき、外国人の観光客に「この建物全体が入るように写真を撮ってください」と英語で頼まれたことがあります。授業で英会話を学習しているものの、実際日常で急にこのような場面に出会うとうまく話せないものです。その意味で、小中高生の外国人との交流の機会を数多く設けるべきです。

他には、県内のそれぞれの神社で行われる行事や祭などのポスターを制作することです。小学生から大人までに、ポスターデザインを募集しポスターを制作します。そうすることで、神社が身近な存在に感じられ、県民からの注目を得る企画です。水戸市にある護国神社では、笥掘りというイベント

を行っています。またつくばみらい市にある高岡愛宕神社では、貴重な文化財となる綱火が行われます。私たち県民にもあまり知られておらず、あまり馴染みのない行事もたくさんあると思います。地元の方たちだけではなく、多くの茨城県民にも知ってもらいたい。そんな願いもこめポスターを制作し、県全域に発信し広めていこうという提案です。

こうした提案をもとにし、茨城県の貴重な重要文化財を守り、他県だけでなく県民や海外からの注目を集め、茨城県を盛り上げていきたいと考えています。現在県内では、メロンなどの農作物をいかしたスイーツなどが開発され、注目されています。私は農作物だけではなく、県内の神社ももっとアピールできると思います。境内を出た神社の近隣に、神社の風景をいかして和菓子が味わえる甘味処の設置など、神社の風情をいかした案も考えられます。

より良い茨城にするために、大好きな神社をいかした提案を実行するために、まず県民に地元の神社に興味を持ってもらいたいです。こんなにも茨城県には魅力のあるものがあると、こんなにも綺麗な所があると、県内、県外、さらに海外にまで発信したいです。日本の心を大切にしたいという思いから、神社を取り上げましたが、県民である私でも県内の神社の良さを改めて実感しました。



いたこし、だあいすき

潮来市立津知小学校 一年 久保田 琉璃珂くぼた るりか

わたしは、うまれたときから「いたこし」にすんでいます。いたこしは、いばらきけんのひがしのほうにあるそうです。そして、

「きたうらとかすみがうらというふたつのみずうみと、きたとねがわというかわにかこまれていて、むかしからおみずがたくさんあるところだよ。」

と、おかあさんにおしえてもらいました。

わたしのかよっているしょうがっこうも、まわりにもりがあつて、たんぼのあいだのみちをとおつて、まいにちつうがくしています。みどりがいっぱい、おこめがおいしいすてきなまちです。

いたこしは、あやめがゆうめいです。まいとし、ごがつからろくがつにかけて「あやめまつり」がおこなわれます。わたしも、ほいくえんのころから、おじいちゃんとおばあちゃんにつれていつてもらっています。あやめは、こいむらさきいろでちようちよみたいなかたちをしています。いいかおりがして、きれいなおはなです。

あやめえんのちかくには、まえかわというちいさなかわがながれています。きよねん、ほいくえんでけんがくにいった

とき、「さつぱぶね」にはじめてのりました。さつぱぶねは、せんだうさんがてでこいですすんでいきます。きのふねで、ちよつとこわかつたけど、かわからふいてくるかぜが、きもちよかったです。

ことしは、おかあさんもいっしょによるきました。たくさんのかかりでらいとあつぷされていて、すぐきれいでした。ちようど「よめいりぶね」がやっていて、およめさんがみんなにはくしゅでおいわいされていました。しろいおきものをきて、とてもしあわせそうでした。わたしも、おとなになつたらよめいりぶねでおよめにいきたいなとおもいました。ゆめがかなうといいです。

キジの住める町

結城市立結城小学校 五年 藤田 知里ふじ た ち さと

車をだそうとエンジンをかけた。すると、カーポートの上にドシンと落ちてきたのはキジだった。キジも私の家族もおどろいた。家の屋根でねていたのかな？ 犬の散歩中に出くわした時は、飛んでにげればいいのに、すごい勢いで走り去った。とてもきれいな青緑色の羽と、長いしっぽを持つオスだった。また、あるときは、茶色の丸い体のメスがヒナを連れて歩いていた。歩く姿はかわいらしかった。

全部、聞いた話だ。

私が生まれたころまでは、背の高さぐらいの雑草が一面に生えた、広い空き地があった。元高校農学科実習地、そこに

毎年、キジが子育てにきていたそう。今は、おしゃれな住宅街に変わり、残りの土地は除草剤がまかれた、見通しの良い、ただの空き地になった。

キジはいなくなった。

私が生まれてから、たった十年の出来事、あたりまえの様にいた身近な生き物が、ある日、とつ然いなくなる。少し不気味な感じ。十年後は？ 日本全体では？ 人間以外の生き物のかん境は、どのように変わっていくのだろうか。私の好きな町の風景もなくなってしまうのだろうか。

私は、つくば山まで続くような田んぼに囲まれて育った。

春にはあぜ道でヨモギ取りをし、用水路からきれいな水がたっぷり取りこまれキラキラしている田んぼにかな声をあげた。苗が育って青々とした田んぼを見ると、心が落ちついた。かり入れの季節イネを見ると、おいしく実ったんだな、早く食べたいな、と思いながら見つめた。冬は、わらぼっちを「おばけだー」とぼうでつついて、遊んだ。その田んぼも、農家の高れい化で、だんだんアパートに変わってきた。今度はカエルもいなくなってしまうのかな？ 高れい化で耕やさなくなった田畑を、次の農業のいない手が現れるまで、保全しながらつなぐ何か良い方法はないのかなと思う。キジだけではない、人間と他の生き物がゆるやかにつながれている様な自然がこれからも私の町に残ってほしいと思う。

七月、「早く、早く。」と、せかされて外に出た。てっぷり丸いメスのキジがいた。私に気付き、小またの早足でにげていってしまった。体と足がアンバランスで、走る姿にクスッと笑ってしまった。空き家になったおとなりの庭で子育てを

始めていたらしい。五時前から「チョッ、チョッ。」と、大声で鳴くキジに苦笑いしながら、「子育てがんばってね。」と応えんしている。不器用そうな日本の国鳥キジ、これから先も茨城で、私の町で、見ることでできる鳥であってほしいな、と思う。そのために出来ることを考えていきたい。

お帰りなさい。

そして、初めまして。

キジさん。

何も無いからこそその幸せ

桜川市立桃山中学校 三年 野^の口^{ぐち}花^か織^{おり}

今、「茨城」の事を調べてみると、まず最初に思い浮かぶ事は全国の人からみて、都道府県魅力度ランキングで「最下位」だという事です。そして、私の住んでいる「桜川市真壁町」という所は以前テレビで「陸の孤島」という表現で紹介されていました。最下位も陸の孤島のどちらもあり聞こえの良いものではありません。でも、実際この土地に住んで暮らしている私にとっては、すごく不便で魅力が無いと感じた事はあまりありません。しかし、都会の様な有名なお店がたくさんあり、色々な場所へ移動するにもバスはたくさん走っているし、電車は二、三分おきに来る様な便利な街へのあこがれが無いのかというと、それもうそになります。

私がこの桜川市真壁町に住んでいて感じる事は、私の周りにいるみんながとてもおだやかで、やさしい人がたくさんい

る事です。朝、学校の行く時に近所とすれ違うと「おはよう
気をつけていつてらっしゃい」と声をかけてくれたり、また
学校からの帰り道にも「おかえり」などと朝と同じ様にやさ
しいあいさつをしてくれます。都会ではよくとなりに住んで
いる人の顔さえ知らないという人がたくさんいると聞きま
す。こんな、希薄な世の中にあつて、やさしい声をかけても
らい、また地域のみんなに見守ってもらっている様な町に住
んでいる私は小さな幸せを感じることが出来ます。そして、
近所の誰かが病気になったと言えはみんな御見舞に行つた
り、また地域の清掃活動でも全員で協力しあい、地域のみん
なが深くつながっているんだなと思いました。

確かに、楽しく便利に生活して生きていきたいと思う事
は、誰もが思い感じることでとは思いますが、でも、魅力ある
街並みに囲まれて生活し、生きていく事ばかりが良い事だと
は思いません。となりに住んでいる人が誰だか分からない様
なつながりの無い街に住むよりも、周りの人の痛みや苦し
み、そして幸せを分かち合える様な町に住む方がずっと魅力
を感じる事ができるのではないのでしょうか。そして、それ
を感じる事を出来るのが私の住む「桜川市真壁町」であり、こ
の「茨城県」にあると信じています。住んで生活をしている
人が、生きていく事に魅力を感じなくては、その周りの人々
に魅力を伝える事が出来ないのではないのでしょうか。たくさ
ん観光地があり交通の便が良い場所だけが魅力ある地域だと
は思いません。みんなが、その場所へ住んでみたい、そして
地域の輪に溶け込みたいと思われる事も魅力ある地域だと思
います。

これから、人口の減少、高齢化社会、そして地域の過疎化
を茨城県だけでは無く、日本全体として大きな問題を抱える
時代になってきました。私達、若い世代が立ち向かってクリ
アしていかねければならない問題は、これからたくさん出て
くると思います。私が生まれ住んでいる茨城県も、私達の若
い力でたくさん魅力ある県に生まれ変わらせる努力をして
いこうと思います。

身近な自然

茨城県立水戸高等特別支援学校

一年

綿

引

璃緒菜

私の家の周りは、自然がいっぱいです。緑に囲まれて生活
しています。たくさん植木があります。植木には、それぞ
れ種類があつて、どれも魅力的です。私は、その中で、しだ
れ桜を育てています。大きく成長するのを楽しみに待ってい
ます。私の庭の植木は、五十本ぐらいあります。たくさん
あつて覚えられないくらいです。ツゲの木、梅の木、ゆずの
木、もみじの木などがあります。一番大きな木は、梅の木で
す。樹齢百年以上だと思っています。毎年梅がなります。おばあ
ちゃんがおいしい梅干しを作ってくれます。庭の奥には畑が
あります。畑では、たくさん野菜を作っています。キュウ
リ、ナス、トマト、オクラ、カボチャなどがとれています。ど
れもおいしい野菜ばかりです。その中で、私のお気に入り
は、トマトのアイコです。アイコは、あまい味がします。庭
のところに花も咲いています。朝顔、トラのオ、グラジオラ

ス、松葉菊などです。朝顔は、つるがどんどん伸びてどこまでも広がっています。

にわたりのえさをもらいに野鳥がやってきます。スズメ、ハトです。人慣れしていてもかわいいです。朝、にわたりを外に出すとたくさんのお客さんが庭におりてきます。野鳥観察もできてとても楽しいです。ハトが植木に巣を作って子育てをしているところを見たこともあります。

近くに公園もあります。遊具は、ありませんが景色がとてもきれいです。春には、桜がたくさん咲いてとてもきれいな公園です。

公園の先には、久慈川という川が流れています。茨城県でも大きな川であゆがたくさんとれます。夏にはキャンプをしている人もいます。久慈川の上流は、袋田の滝があります。茨城県の観光地の一つです。大きな滝で冬には凍ることもあります。秋には紅葉がとてもきれいなところなんです。滝の一番上は、どうなっているのかを見たことがないので一度見てみたいんです。袋田の滝がある大子町は、りんごが有名です。夏は暑く冬は寒いのでおいしいりんごができるのです。

茨城県は、たくさんのお客さんに恵まれているところがすごく素敵だと思います。もともとたくさんのお客さんが来たら、よりよい茨城県になるとおもいます。近くには、田んぼがあります。来月には、稲刈りがあります。私の家では、田んぼを作ってもらっています。今の時期は、しらさぎが来て、田んぼの虫を取っています。都会には、見られない風景がとてもきれいです。

茨城県は、米作りが盛んな県です。米の種類もたくさんあ

ります。茨城県には、海もあります。きれいな海水浴場がたくさんあります。夏は、たくさんのお客さんにぎわっています。自然がたくさんある茨城県が大好きです。これからも自然を大切にして、地球の緑を守っていきましょう。

私は、自然に関する本を読んで、いろいろな植物が成長していく様子がわかりました。これからも、大好きな茨城の自然を大切にしていきたいと思っています。

おとうさん、おかあさんのしごと

水戸市立双葉台小学校 一年 板倉春樹

ぼくのおとうさんはしょうぼうしです。かじのときやきゅうじよのときに、みんなをまとめるたいちようをしています。かじのときには、ひにむかつていきます。じこのときには、うごけなくなったひとを、くるまのなかからたすけます。みずのじこでは、おぼれたひとをたすけます。みんなをたすけるために、いっしょうけんめいはたらいしています。ぼくは、おとうさんをつつこいいとおもっています。

おかあさんはかんごしです。びょうきや、ほねのおれたひとをみています。ちをとったり、ちゅうしゃをしたりするだけじゃなくて、おむつをかえたり、うごけないひとをおふろにいれたりしています。ほねがおれたひとは、いたい、いたいとおとなどもなくおかあさんはいつています。だから、ぼくはおおきなけをしにようにきをつけたいです。びょういんでは、やさしいかんごしだけど、いえでぼくにべんきようをおしえるおかあさんは、とってもこわいです。

やすみのときには、おとうさんもおかあさんもあそんでくれます。ひとをたすけるしごとをいっしょうけんめいがんばる、おとうさんとおかあさんがだいすきです。

ぼくのだいすきなみと

水戸市立渡里小学校 一年 上木一成

「なつとうごはんいかがですか。」

きよねん、いばらきのおまつりでおとうさんと、みとにきたひとになつとうをしようかいするボランティアをしました。

さいしよははずかしかったけれど、だんだんできておおきなこえをだせるようになりました。それは、みちをあるくひとが「がんばって」といつてくれたからです。

じぶんがこえをかけたひとがかつてくれたとき、うれしいきもちでいっぱいになりました。せつかくゆうきをだしてこえをかけてもいつてしまったときは、かなしくなりました。みとはなつとうがゆうめいだから、みんなにたべてもらえたらうれしいです。そして、みとをすきになってほしいです。ぼくはなつとうがにがてでした。ねばねばするからです。でも、おとうさんにねばねばがからだにいいことをおしえてもらって、がんばってたべてみました。そうしたら、とてもおいしかったです。

なつとうがにがてなひとはたくさんいるとおもいます。そんなひとが、みとにきてぼくのしょうかいしたなつとうをたべて、すこしでもすきになってもらえたらいいなとおもいます。

ことしもおまつりがあつたら、ぼくはきよねんよりがんばっておおきなこえをだして、たくさんのおひとになつとうの

おいしさをしつてもらいたいです。

おとうさんのお休み

大子町立だいご小学校 二年 小室 隼磨

ぼくは一週間の中で、水曜日が大きいです。なぜかというと、おとうさんのおしごとがお休みの日だからです。

おとうさんは、おじいちゃんといっしょにちゅうかりようりやさんをしています。だから、ぼくたちがお休みの日は、いつもおしごとをしています。夜は、ぼくたちがねてからおそくにかえってくるから、なかなかあそぶ時間がありません。でも水曜日はお休みだから、学校からかえると、かならずおとうさんがいてくれます。いっしょにあそぶために、ベんきようを早くおわらせます。いっしょにごはんをたべて、おふろに入って、トランプをしたりしてあそびます。

それから、おとうさんはサッカーのコーチをしています。ぼくは、三さいのころからサッカーをおしえてもらっています。ドリブルやリフティングをわかりやすくおしえてくれます。ミニゲームの時は、きびしくどなられる時もあります。でももつとじょうずになるために言ってくれているから、ぜんぜんこわくありません。そのあとにおふろに入りながら、その日のれんしゅうのはんせいをするのが、ぼくは大好きです。なぜかというとおとうさんとふたりきりのだいいな時間だからです。学校のことを話したり、おかあさんにはないしょの話をしたりもします。男どうしのたのしい時間

です。

まい日おそくまでおしごとをしていてたいへんだけど、いつもやさしいおとうさんが、ぼくは大きいです。だから、おとうさんみたいに、サッカーでぜん国大会に行つて、おとうさんをよろこばせたいと思います。

ホタルのさと

高萩市立秋山小学校 二年 宇佐美 悠生

六月のおわりの日よう日、夕ごはんがおわると、お父さんが、

「よし、今からホタルをさがしに行くぞ。」

と言いました。ぼくは、今年はホタルがいるかな、いないかなと思いました。

ぼくたち家ぞくは、まい年夏のはじめに、車につけてホタルを見に行きます。ホタルがいる田んぼは二かしょあつて、ぼくは、「ホタルのさと」と名づけました。

「ホタルのさと」につくと、車のライトをけしました。ぼくは、まっくらな田んぼをじつとみていました。すると、

「あ、いた。」

と、妹が声をあげました。よく見ると、何びきかのホタルがゆらゆらととんでいます。田んぼの土手やよう水ろのまがり角など、いろいろなところにいました。ひかりのあとがのこのように、ひかたりきえたりしながらとんでいます。

「まるで、ひかりで絵を書いてるみたいだな。」

とぼくは思いました。

家にかえってから、お父さんが、子どものころの話をしてくれました。夏になると、家のまえの田んぼには、ホタルがほしのようにたくさんいたそうです。夕ごはんをたべていると、へやにホタルが入ってきて、外ににがしてあげたこともあったと言っていました。ぼくも、そんなにたくさんホタルを見てみたいと思いました。

今では、むかしのようにたくさんホタルはいません。川がよごれてしまったり、土手がコンクリートになって、ホタルがすめなくなったそうです。

ぼくにできることは、川にゴミをすてないことぐらいしかありません。でも、すこしでも川がきれいになって、お父さんの子どものころのように、ぼくの家のにわにも、ホタルがたくさんとぶといいなと思います。

みらいにむけて、「いまぼくができること」

水戸市立千波小学校 二年 石 いし 崎 さき 覚 あきら

ぼくは、いばらきけん水と市にすんでいます。いえの近くには、千ばこというみずうみがあります。ぼくは、千ばこのまわりをじてん車ではしったり、森の中にあるこうえんで、キャッチボールをするのが好きです。

千ばこでは、月に一回、千ばこかんきょう学しゅう会をやっています。ぼくは、ボートにのって、みずうみの水しつけんさをしたり、千ばこのまわりのしよくぶつをしらべたり

しました。そのほかに、千ばことつながっているさくら川で、サケがたまごをうむところをかんさつしたり、たまごをしらべたりしました。それから、サケの赤ちゃんを川にはなすこともやりました。

サケの赤ちゃんは、川から海までおよいで、大人になったら、四年後に、たまごをうみにもどってくるそうです。もし、川がきたなくなったら、もうもどってこないかもしれません。だからぼくは、さくら川やそのほかの川をきたなくしないようにしたいと思います。なぜなら、四年後に、サケがもどってきてほしいからです。川にごみをなげたりしないようにしたいです。

これからも、ちょうさにさんかして、水をしらべたり、ごみをひろってきれいにしたりしたいです。そして、どうろや、こうえんや、山にもごみをすてないようにしたいです。

みらいの水と市が、いつまでもきれいでいてほしいです。みんなにもごみをすてないでほしいです。千ばこやさくら川を、じぶんの手でできるだけきれいにしていきたいです。そして、サケが元気にもどってこられるようにしたいです。サケが、たまごをいっぱいうんで、どんどんせいちょうして、りっぱなサケの大人になってほしいからです。

かすみがうらのみらい

土浦市立斗利出小学校 二年 宮^{みや}嶋^{じま}建^{たけ}瑠^る

ぼくは、かすみがうらへおじいちゃんと、何回かつりに行ったことがあります。日本で二ばん目に大きいみずうみです。そこで、ぼくは、六十センチちかくあるアメリカナマズをつったことがあります。ナマズのひく力がすごくつよかったので、さおをおじいちゃんにもってもらって、ぼくはあみですくいました。こんなに大きなさかなをつったのははじめてで、とってもうれしかったです。

でも、気になったことが二つあります。一つは、アメリカナマズいがいのさかなをつったことがないということです。おじいちゃんの話では、むかしはコイやフナがいっぱいいたそうです。でも今は、外国のさかながふえてしまって、日本のさかなの子どもやたまごをたべてしまうそうです。外国のさかなはつよくて大きいので、日本のさかなはまけてしまいます。だから、コイやフナの数が増えてしまったので、なかなかつれないのです。

二つ目は、かすみがうらの水がきたないということです。水の色はきたないみどり色で、たまにくさくて、へんなにおいがします。よく見ると、ゴミがういていたり、しんどくさったさかながういていたりしました。水がきたなくなったら、わけは、いろいろあるかもしれないけれど、まずゴミのポイすてをしないなど小さなことから気をつけたほうがいいと思います。

ぼくは、つりがすきなので、いろいろなさかながつれるかすみがうらになってほしいです。そして、五十センチのコイをつることがもくひょうです。

わたしのきょうだい

笠間市立友部小学校 二年 深^{ふか}谷^や友^ゆ萌^め

わたしは、三人きょうだいです。妹と弟がいます。

妹は、四さいです。いつも、お絵かきやままごとをしてあそんでいます。外では、すなばやかけっこをしてあそびます。とても楽しいです。妹は、わたしのすることを、いろいろまねをします。まねしているところを見ると、わたしのことが、好きなのだなとうれしくなります。

弟は、夏休みになってから生まれました。いつ生まれるのか、どきどきしながらまっています。

生まれた日は、わたしのピアノのはっぴょう会でした。はっぴょう会がおわったあと、お父さんとお母さんは、びょういんに行きました。わたしたちは、家にかえってれんらくをまっています。れんらくがきた時、とてもうれしくて早くあいたい気もちになりました。びょういんに行き、はじめてあえた時は、とてもうれしかったです。

今、わたしはおむつをかえたり、泣いてしまった時に、だっこしてあげています。大きな声で泣いていても、わたしがだっこしてあげると、泣きやみます。うれしいです。早く大きくなって、弟もいっしょにあそびたいです。

わたしが、一ばん上のお姉さんなので、たくさんあそんであげたいです。けんかもするけれど、これからもなかよくしていききたいです。

実りのけしき

茨城大学教育学部附属小学校 三年 仲根隆介

ぼくは、茨城県が大好きです。茨城に住んでいてよかったと思っています。

そのわけは、おいしい物が県内でいっぱいとれるからです。

茨城には、たくさんのお畑や田などがあります。ぼくは、いつも見る風景なのであたり前だと思っていました。

ぼくがようち園生だった時に、家族とひいおばあちゃんです少しはなれた場所にあるスーパーマーケットに行きました。と中、車のまどから広々とした畑が見えてきました。畑を見たひいおばあちゃんはとてもよろこんで、「いいね、すばらしいけしきだね。」とずっとながめていました。ひいおばあちゃん、何年か前に札幌市から引っ越して来たので、そんなけしきを見た事がなかったそうです。

その時のぼくは、どうしてひいおばあちゃんがよろこんでいるのか、よく分かりませんでした。

しばらくして、おじさんが「都道府県大図鑑」という本をプレゼントしてくれました。茨城県について調べてみたところ茨城県の面せきに対するこう地面せきのわり合が全国で一

位だということが分かりました。他にも、メロンやレンコンやくりなどが日本一のしゅうかくりようである事も分かりました。

ふつうだと思っていたけれど、茨城県の農きようは実はすごかったのです。

ひいおばあちゃんがよろこんでいたのは、茨城のゆたかな実りのけしきだったのです。

ぼくは、夏休みにメロンをたくさん食べました。この前おばあちゃんが買ってきてくれたなしもとてもおいしかったです。秋には、おいしいお米がとれるのが楽しみです。冬には毎年、土うらの農家へレンコンを買いに行きます。ぼくの大好物です。

おいしいものがたくさんとれる茨城は、ぼくの自慢です。

家族のしごと

八千代町立中結城小学校 三年 安田渚

ぼくの家は、お父さん、お母さん、お姉ちゃん、おじいちゃんとおばあちゃんの六人家ぞくです。

ぼくのおじいちゃんとおばあちゃんは、のうぎようをやっています。メロン、ナス、キャベツ、トマト、ピーマン、キュウリ、米など、いろいろな野さいを作っています。

野さいは、なえを植えてから、何か月もたってから実がなります。その間に草をぬいたり水をあげたりと、ぼくのおじ

いちゃんとおばあちゃんが世話をします。しゅうかくすると箱につめられて、北海道の市場で売られます。遠い所で買ってもらえるのはうれしいです。

今日は、ナスが入ったおつゆでそうめんを食べました。さ
いこうにナスがおいしかったです。またナスの実がなつてき
ました。いついっぱい実がなるのか分かりませんが、楽しみです。
早く食べたいけれど、市場に出してしまうのであまり
食べられません。小さいナスしか食べたことがないので、大
きなナスをいどでも食べてみたいです。大きなものを一本食
べたことはないの、食べきれるかどうかわかりません。

ぼくのおじいちゃんとおばあちゃんは、毎日暑い日も寒い
日も、一生けんめい仕事をしています。だからおいしい野さ
いが食べられます。ぼくも手伝っておいしい野さいがたくさ
んできるといいなあと思います。

ぼくも大人になったら、自分で何か育ててみたいです。そ
して、自分で育てた野さいを、おじいちゃんやおばあちゃん
に食べさせてあげたいです。

家族の仕事

筑西市立鳥羽小学校 三年 飯田 裕

わたしのパパとお母さんは、かわら屋さんと、とこ屋さん
です。

パパは、暑い中、外ではたらいしています。パパは、パパの
お父さん（おじいちゃん）といっしょにはたらいしています。

お母さんはお母さん（おばあちゃん）とはたらいしています。
パパもお母さんも親と一しょにはたらいしていて、なかよそ
うに、わたしはみえます。

パパの夏は、とてもつらそうです。夏の暑い日は、かわら
の上で、めだまやきがやけるほど、かわらがあつくなるそう
です。だからパパの足のうらは固くて、ごつごつしていま
す。まるでくつのそのようです。夏は、ねっ中しようにな
る人が多いと、よくテレビでやっているの、パパには、水
分ほきゅうをしっかりしてほしいです。

お母さんの仕事は、パパとはぎやくで、中でお仕事をして
います。

お母さんの仕事は、はさみやカミソリを上手につかって、
お客さんをきれいにしています。いろいろなお客さんが来る
ので楽しいです。

パパは休みの日が日曜日で、お母さんは火曜日なので、家
族みんなで遊びに行けるのは、月に一回くらいです。わたし
はもつとたくさん遊びにいきたいです。これが、今、わたし
の一番のなやみです。

仕事がこんなたいへんな事だとは、思いませんでした。
この作文を書いて、色々を知ることが出来て、パパとお母さ
んってすごいなあとあらためて思いました。

大好き田んぼと私の家族

坂東市立岩井第二小学校 三年 小林 こばやし 花 はな

私は茨城県の県南西部、市内に利根川や江川、飯沼川などたくさん川が流れている町に住んでいます。この川沿にはたくさん田んぼがあります。

私の家からも歩いてすぐに田んぼが広がっています。私はこの田んぼの土手を家族とさんぽするのが大好きです。私の家はお米を作る農家ではないのですが、家族全員生まれも育ちも同じ地域なのでみんな田んぼの事、生えている植物や生き物等とてもくわしいです。

冬の寒い時は田んぼに水はありません。草もかれて冷たい風がふきます。でも風のない日はとてもぽかぽかしてあたたかいです。土手のかれ草に付いている虫の卵を見ついたりします。春になると田んぼに水が入ります。田んぼのへりも泥で固められてきれいにお化粧したみたいになります。四角い田んぼに水が入ると大きな鏡のような水面がキラキラします。いねを植えるために田んぼをうなつて土をやわらかくするのだとお父さんに教えてもらいました。真夏の暑い時はおばあちゃんと早起きして田んぼにいきます。とてもすずしい風が吹いて来ます。秋はいねが黄色くなってやわらかいじゅうたんみたいです。

私は一年の中でも夏のはじめの風のある日が一番のお気に入りです。いねが少し大きくなりふさふさのみどり一面になります。そこに風が吹いてきていねがゆれます。その中をお

父さんとお母さんとお話をしながらゆつくり歩きます。ねこじゃらしであそんだりささぶねを作ったり、お花を見たりします。あつくもなく寒くもなく心がうきうきします。私はこんな大好きな景色の中をいつまでも家族といっしょにさんぽできたらいいと思います。

足尾神社のふっ活を信じて

桜川市立真壁小学校 四年 井上 いのうえ ひろこ

「えっ！こんなになっちゃったの。何もなくなっちゃった。草だらけ。」ひさしぶりに行った足尾神社を見た時の、私の初めての言葉でした。

四年前、保育園生だった私は家族みんなで山登りに行きました。桜川市と石岡市の間にある足尾山へ山登りのと中、足尾神社にお参りに行きました。小さい鳥居を通って細い山道の参道を登って行くと、両側に竹やぶが現れました。山のちよう上に竹やぶって不思議な感じがしました。その先の二の鳥居をくぐると、そこは立っぱな神社と石の置物がいっぱいあってとてもすてきな場所でした。こんなところに、すごい神社があるんだなって思いました。さらに、神社のおくの細い山道を十分ぐらい登っていくと、天空に来たような場所になりました。三百六十度見わたせるちよう上で、天空の城にいる気分になれる場所でした。山登りでつかれた私は、そこに横になって空をながめていました。すぐく気持ちのいい風がふいてきました。

帰り道、神社のかたすみには、足やくつ、サンダルなどがいっぱい積んであり、不思議に思った私は、お父さんに聞いてみました。

「ここになんで足やくつが置いてあるの？」

「ここは足の神社だから足が悪い人が、お参りに来るんだよ。足を治したい人も、治った人もみんな義足やくつを持ってくるんだよ。」

と教えてくれました。不思議に思った私は、家に帰って調べてみました。

足尾神社は、九百二十年前ごろ平安時代に、だいて天皇が足がいたいときに、この足尾神社のゆめを見て足が治ったことで、「日本最初の足尾神社」としてまとめられたそうです。足の病を治す神社として、信者がわらじやぞうりをおさめる風習が生まれたと言われています。くつやサンダルなどと形を変えています、今でも続けてほうのうされているそうです。

今年の夏に、ひさしぶりに足尾神社へ行ってみると、神社はこわれていて土台の石の部分しかのこっていませんでした。鳥居もなく石の置物も何もありませんでした。草が生えていて歩くのも大変でした。山ちように登っていくところも草がたくさんで、はいでもこわれかけていました。それでも、山ちようからの景色は前と変わらずとてもきれいでした。こんなにあれ果ててしまって、とてもざんねんでした。

私は、この足尾神社を天空の城ラピュタのようにしたいです。そして、昔のように人々がたくさん集まって来て、足の病になやまされている人達の足が治るようにおねがいしたい

です。私の近くには、こんなにもすてきな場所があります。みんなこの風景を見たら、きつと好きになってくれると思います。そんな場所を、私はほこりに思います。

生き物も人も笑顔で元気なまち

取手市立戸頭東小学校 四年 駒^{こま}木^き あおい

私が住んでいる取手市で、好きなのところが三つあります。一つ目は、生き物がたくさんいるところです。かぶと虫やカエル、カマキリなど畑や公園などでつかまえることができます。かぶと虫やカエルは家で育てていました。特にカエルはずつとかつているとなついて、私が行くと鳴いたり、とびはねて手にのつてきたりしました。とてもかわいいなと思いました。

カマキリは、校庭で見つけたたまごを、学校の教室で育てました。教室でカマキリのたまごから、赤ちゃんがかえった時、消しゴムのかす位の大きさでびっくりしました。

二つ目は、公園がたくさんあるところです。その中でも戸頭公園が一番好きです。保育所の散歩でもよく行きました。遊具もたくさんあります。木の遊具でつり橋もあり、みんなで楽しめます。小さい子は砂場でいっしょに遊んでいると、知らない子でもすぐに友達になれます。

じよせんの間は遊べなかったけれど、今は新しいしばも生えて、また遊べるようになってよかったです。

三つ目はグリスポがあるとこです。グリスポとは、「ゲ

リンスポーツセンター」といういろいろなスポーツができるたてものです。

グリスポはだれでも行くことができ、使えます。温水プールや夏は流れるプールもあります。スポーツのイベントもあって、プロバスケットチームの試合も目の前で見ることもできます。

それから、「地いきがたそう合スポーツクラブ」の交流会もよくあります。これは、子どもからおじいちゃん、おばあちゃんまで参加できるスポーツのイベントです。私は友達といっしょに参加するのが楽しいです。この前はみんなで大玉ころがしやスプリンレースなど、運動会みたいな種目をやりました。私たちは、学校ではやったことのない種目があったて、楽しかったです。おじいちゃんおばあちゃんたちは、目をキラキラさせていろんな種目をやっていました。みんな生き生きしていました。知らない人でもいっしょのチームになると話したり、勝って喜んだりしました。

取手市は今、学校がどんどん合っています。私の学校も来年となりの小学校と合います。将来は使わなくなった学校を利用して、みんなでお泊まり会をしたり、夜はキャンプファイヤーや花火をしたりする場所になつてほしいです。

生き物もたくさんいるので、「生き物園」で遊べるしせつができたらいなと思います。イモリやヤドカリがとれたり、いっしょに遊べたりしたら、もっと生き物が大好きな子ども達がふえると思います。

これからさらに、生き物も人も、笑顔で元気なまちなつ

てほしいと思います。

さぶやんと灯り

茨城大学教育学部附属小学校 五年 川崎 丹 瑚

学校に行くときにいつも通っているところにある大銀杏、その大銀杏を授業で調べたことが、さぶやんを知ることのできるきっかけとなりました。

「あんな焼け野原で何もなくなったところから、どうやって水戸の町が復興したのだろう。」

私は不思議に思い母に聞きました。

「まず生活に必要なもの、いろいろあるけど、電気。にこのひいおじいちゃんは、電気をたくさんの家やお店、工場で使えるように工事をする仕事を戦争が終わってすぐに水戸で始めたそうだよ。」

と母が教えてくれました。母方のひいおじいさんは私が生まれる前に亡くなっていたけれど、祖父と祖母の家に遊びに行くとき々、

「さぶやんがね。」

と話しているのを聞いていました。

祖父は「さぶやん」が始めた「三興電気」という電気工事の会社の社長です。祖父に会社ができたころのことを聞きました。

「じいちゃんもまだ学校へ上がる前の小さいころだったからあとで聞いたんだけどな。」

と言いながら覚えていることを話してくれました。

さぶやんは三郎という名前です。戦争のときは電気の仕事をするために中国の上海というところに行きました。だから兵隊には行かなかったそうです。

戦争が終わってさぶやんが水戸に戻ってきてから、電気も配給で一日に何時間かしが使えなかったそうです。ただ、電気が使えても灯りをつける器具もないからつけられないところろがたくさんあったそうです。

「近所の人にうちに電気をつけてちょうだいとたのまれているうちに、会社をつくって水戸の町のあちこちに電気をつける工事をしたのが始まりだったそうだよ。」

と祖父は話してくれました。今年、三興電気は六十八周年だそうです。ちょうど昔の写真があったので見せてもらいました。祖父はおさるみたいな男の子で、さぶやんはとてもハンサムに見えました。

電気がないときのくらしを、私も体験しました。東日本大震災のときです。町中全部が真っ暗だったのは生まれて初めてのことでした。とても心細いし、不便でした。かい中電灯で部屋の中がぼんやり明るくなったのを見たときに安心したことを覚えています。

さぶやんに灯りをつけてもらった人はみんな、同じように安心してうれしかったのかな、すごいな、さぶやん、会ってみたいな、と思いました。

灯りがきれいな町は平和なんだと思います。私の家の近所も、お祭りやクリスマスに道がライトアップされてとてもきれいです。大切な私のふるさとが、平和の灯りでずっと明る

くなっているといいなと思います。

わたしのふるさとじまん——干しいも——

ひたちなか市立外野小学校 五年 富^{とみ}田^た未^み来^く

干しいもは、さつまいもをかんそうさせて作る昔からある保ぜん食です。わたしの住むひたちなか市周辺で、日本の生産量の八割以上を作っています。栄養面では、食物せんいが多く、ビタミンCやビタミンB-1、カリウム等がふくまれています。体に良い自然食です。一九〇八年、さつまいもに適した土と、冬のかんそうした気候を生かして、ひたちなか市で生産が始まりました。自然のあま味があつて、とてもおいしいです。

お母さんの友達に、家族で干しいもを作っている人がいます。冬になって干しいもが出来る、毎年お母さんとおばあちゃんといっしょに、その友達の所に行きます。帰りの車の中で、いつも家まで待ちきれず、買ったばかりの干しいもをみんなで食べます。

「今年の干しいもは、すごくあまいね。」

「このおいしいもは、やわらかいよ。」

と、話しながら食べるのが楽しいです。

買ってきた干しいもを、県外に住んでいる親せき達に送ります。県外では、出来たてのやわらかい干しいもは、なかなか手に入らないらしく、

「こんなおいしい干しいもは、どこのスーパーを探して

も、売っていないよ。」

と、とても喜んでくれます。みんな茨城の干しいものがとどくのを、楽しみに待っています。

栄養があつて、手軽に食べられるのも、干しいものの良い所だと思います。わたしは小さいころ食が細くて、お母さんはいつも心配していました。でも、干しいもを手持たせておくと、いつの間にか一枚、二枚と食べていたので、安心したそうです。

干しいもは、寒さがきびしい方がもつとおいしくなります。「冷たいからっ風がふくと、あま味がますんだよ。」と、聞いた事があります。わたしは、寒いのはきらいだけど、その話を思い出すと、冬の寒さが少しがまん出来ます。

ほしいもを作っているお母さんの友達に、干しいも作りで大変な事を聞いてみました。干しいもは冬に出き上がるので、冬だけいそがしいと思われがちですが、一年を通しての仕事だということが分かりました。いもを育てるには、畑をたがやしたり、種いもから苗を育てなければなりません。おいもは重いので、いもほりをしたり運ぶのもつらいそうです。また、いもをふかして切ったり干したりするのは、全て手作業なので、とても手間がかかると教えてくれました。それでも、食べた人に「おいしかったよ。」と言われると、うれしくて、やつぱり作っていて良かったと思うそうです。

話を聞いて、こんな苦労があつたんだと思う事がたくさんありました。大変だけど、これからもおいしい干しいもを作り続けてほしいです。干しいもが茨城の名産で、本当にうれしく思います。

大好きぼくの桜川市

桜川市立大國小学校 五年 浅賀恒紀^{あさが へいき}

筑波山が大きく見えて、近くには桜川が流れているぼくが大好きな桜川市。まわりは田んぼや畑に囲まれた場所に、小さな無人駅があります。無人駅は、とてもきたないというイメージがありますが、地区のおじさんやおばさんが先頭に立って、「いきいきエキサイト」という活動をしています。だけれどもが気持ちよく利用できるようにと、駅のトイレや周辺のそうじを行ってくれるので、駅のまわりはいつもきれいです。駅の中には、地区のおじさんが作った木のつくえやいすがあつたり、かべには、桜川市の写真や絵がかざられています。電車を待っている人にも楽しんでもらいたいというみんなのやさしい気持ちが伝わります。

そして、毎年八月七日の七夕まつりの夜には、「おりひめとひこぼしを見てみよう」と子どもからお年寄りみんなが駅に集まり楽しくすごします。昨年は、おじさんが持つてきてくれた天体望遠鏡から、きれいな星を見つけることができました。

それから、「カッカカッ」とひょうしぎがなると、ぼくのお母さんが読む紙しばいが始まります。どんな話が始まるのかワクワクします。

そして、ぼくが一番楽しみにしていることは、おじさんの畑でとれたスイカやかき氷をごちそうになることです。おじさんの作ったスイカはとてもあまくておいしいです。

ぼくのおばあちゃんも庭で野菜を作っています。おばあちゃんが野菜をとってくれるときに必ず言う言葉があります。

「うちの畑の野菜は無農薬で安心安全だよ。地元の物が一番だよ。」

と言います。ぼくも、その通りだと思います。地元のおじさんやおばあちゃんの愛情たっぷりの野菜を食べるとパワーがでて、元気一ぱいがんばることが出来ます。食べることが大好きなぼくのしょう来の夢は、シェフになることです。茨城で作られたおいしい野菜や米を使つて、日本一おいしいカレーを作つて、子どもやお年寄りの喜ぶ顔を見たいです。そのためにも、道路に落ちているゴミ拾いや、花だんの手入れなど小さなことから協力して地元の自然や安全を守ってきたいです。

みんなのやさしさが、ぼくの住む桜川市から、茨城の未来へ。そして、ぼくの夢へ。

おばあちゃんのキャベツ

つくば市立桜南小学校

五年

足^あ立^{だち}

温^{はる}

私は、野菜がきらいです。ですが、ふしぎとおばあちゃんが育てる野菜は食べられます。

お父さんと私は、おばあちゃんの家に遊びに行きました。でも、おばあちゃんがいません。裏の畑を見に行くと、やっぱりいました。汗だけで、畑の草をサッサ、サッサとぬいて

いました。

私に気づいたおばあちゃんは、

「はるちゃんとキャベツとろうと思つてたんだけど行く？」と、言つてくれました。もちろん私は行くとつてトラックに乗りました。畑は少し遠くにあるそうです。

畑につくと、一面がキャベツでうもれてました。これには私もビックリでした。さつそく長ぐつにはきかえ、収かく開始です。

大きいのからどんどん取つていくおばあちゃん、オロオロしている私に氣をつかつてくれたのか、

「このキャベツ取つてトラックにのせといってくれる？」

と、言つてくれました。キャベツを切るのはとても力が必要だったけど、手伝つてもらいながら、なんとか切れました。もちあげようとすると、とっても重かつたです。おばあちゃんは、一つ一つていねいに、そして手際よくトラックにのせていきます。

畑仕事には力も必要なのだと分かりました。

またトラックに乗り家へもどりました。おばあちゃんが、とれたてのキャベツを一枚ち切つて私にくれました。食べる、あまくてシャキシャキで、とってもおいしかったです。おばあちゃんはニコニコとうれしそうな顔をしていました。

そのキャベツは、夜ご飯のサラダになりました。みんなで食べたおばあちゃんのキャベツは、なんだかいつもと違う味でした。

ごはんを食べながら、茨城の野菜の話になりました。

おばあちゃんが言うには、茨城が生産量一位なのは、みず

な、白菜、チンゲンサイ、れんこん、ピーマンなどだそうです。他の野菜も茨城でたくさんとれるそうです。キャベツは四位と言っていました。

新せんな野菜がたくさん手に入る私たち茨城県民は幸せだな、と思いました。

汗を流しながら一生けん命野菜を作ってくれる人がいるからこそ、おいしい野菜ができるんだなと思いました。

私の他にも野菜がきれいな人は、ぜひ茨城の野菜を食べ、こくふくしてもらいたいです。

私の食たくと茨城の野菜

下妻市立下妻小学校 五年 初 ^{はつ} 沢 ^{ざわ} 恵 ^{めぐ} 望 ^み

私は、毎日野菜を食べています。きゅうりやなす、キャベツにレタス、大根、ニンジン、トマトにほうれん草。その他、名前を挙げたらきりがないほど、たくさん野菜を食べています。

ある日、母に、

「この野菜はどこでとれた野菜？」

と聞いてみたところ、

「茨城でとれた野菜だよ。なるべく茨城でとれた野菜をかうようにしているの。」

と答えてくれました。母によると、お店の野菜売り場にはだれがその野菜を作ったのか、農家の方の名前、または産地名が表示されているとの事でした。

次の日、私は母の買い物について行き、野菜売り場で生産者の名前を探してみました。すると、どこで生産されたのか全部の野菜に表示されていました。生産者の他に番号だけ表示されている写真や、中には生産した農家の方の顔写真がのっている野菜もありました。

みんなニコニコしていて、麦わらぼうしをかぶったり、野菜を片手にガッツポーズをしたり、働いている人みんなが写っている写真もありました。その写真を見ながら、「この人たちがこの野菜を作っているんだあ。」と考えていると、なぜか心がおどる様な気分になりました。

その夜、食たくにはたくさん野菜がならびました。私は、今日見た生産者の人の写真を思い出しながら、その野菜を食べました。すると、それらの野菜が何だかいつもよりもおいしく感じました。そして、食べ終わった時には、心が温かく感じて、とても幸せな気分になり、おなかも心もいっぱいになりました。その事を家族に話してみると、

「野菜を作ってくれた人たちの事を考えながら食べたから、感謝の気持ちで芽生えて、おなかと同じくらいに、心もいっぱいになったのかな？」

と話してくれました。その時、私は以前、祖母が、

「米や野菜を作る時は、自分の子供を育てるのと同じ様に、愛情をこめて大切に作っているんだよ。」

と話してくれた事を思い出しました。そして、

「なるほど。だからおなかがいっぱいになった様に、心も感謝の気持ちでいっぱいになったんだ。」

と思いました。

私は、これからは野菜を大切に作ってくれた人の事を思いながら感謝の気持ちを忘れずに、茨城の野菜を食べたいと思いました。そして、体が成長するのと同じ様に、心も大きく成長できたらいいなあと思いました。

笑顔のメッセージ

結城市立山川小学校

六年

おおくぼ 大久保 とも 友 愛

「友愛よく来たなあ。」

いつもニコニコと笑って私たちをむかえてくれたお母さんのお父さん。お母さんが小さかったころ、えん台で星と一緒に見ながら、たくさんの昔話をしてくれたそうだ。私もお母さんと星を見ながら、ろう下でねてみた。自然の風が心地良かった。近くの田んぼからはカエルの大合唱が聞こえてくる。朝日のまぶしさで目が覚めた。いつも布団でねてる時とはちがい、自然を感じた。おじいちゃんとお母さんもこうやって季節を身体で感じていたのかなあと思った。

私の大好きなおじいちゃんは、酪農家だった。生き物が大好きで、ぴったりの仕事だった。近くで見る牛は、私にとっては想像以上に迫力があつた。そんな時も、笑いながら、「大丈夫だよ。」

と牛をなでていた。そんな愛情あふれる温かい存在だった。

しかし、東日本大震災により大きく変わった。福島県の原因事故のえいきょうで生乳が出荷停止におちいったのだ。おじいちゃんの牛たちを心配する顔。早く前のように戻れと私

は思った。そこに、さらなる問題が発生した。一緒に牛の世話をしていた私の叔父さんが病気になってしまったのだ。しかも、手術が必要なぐらいの大病だった。そのため、なくなく辞めることになった。牛たちの行き先が無事に決定した喜びの表情と、どことなくさびしそうな表情。私はその時のおじいちゃんの顔を思い出すたびにむねが苦しくなる。

それから、おじいちゃんは、毎日牛舎に通った。牛たちとの日々をなつかしんでいたのかもしれない。野菜を作っては、みんなに持たせてあげた。おじいちゃんの野菜は、無農薬でとっても新鮮でおいしかった。トマト、きゅうり、玉ねぎ、ジャガイモなど愛情が注がれていて、おじいちゃんの宝物のようだった。きっと野菜の世話をすることで、心のすき間をうめようとしていたのかもしれない。

そんな元氣一ぱいなおじいちゃんが、体調をこわした。でも、笑顔だけはかわらなかった。しかし、天国へ旅立ってしまったのだ。私は、信じられなかった。あまりにも悲しくて、涙もでなかった。いなくなつてわかるおじいちゃんの存在。

ある時、ふと見たおじいちゃんの写真。そこには、いつもと変わらない笑顔があつた。おじいちゃんは、私たちの心の太陽だった。どんな時も笑っていて、だれよりもみんなのことを心配し、見守っていてくれた。

いつもおじいちゃんが応えんしてくれている。そう思うとパワーがあふれてくる。今日も私は笑顔でがんばれる。

家族みんなの良い所自まん

ひたちなか市立佐野小学校 六年 河^{かわ}野^の莉^り緒^お

わたしの家族は五人います。お父さん、お母さん、お姉ちゃん、お兄ちゃん、そしてわたし。人間は一人一人ちがうからなお良い生き物です。わたしの家族にも良いところがたくさんあります。

お父さんは、

『やると思ったらやる、根性の持ち主』

です。わたしが今習っているテニスを始めたきっかけは、お父さんといっしょにテニスを始めてからです。その他にもゴルフ、スノーボードなどとお父さんが、

「やってみようか。」

と言ってくれなかったら始めていませんでした。たくさんスポーツと出会わせてくれたり、やるからにはしっかりとやる心を教えてくれてありがとう。

お母さんは、

『信念とパワフルな力を持ったスーパースター』

です。仕事で帰ってくることがおそくなってもわたしたちのためにあたたかい食事を作ってくれます。わたしが小さいころに姉とよくケンカをしていていつも泣いていました。なぐさめ役はいつもお母さんでした。そのとき、

「りお、あきらめちゃだめよ。やられたらやりかえせばいいじゃない。」

と言ってくれました。あきらめない心と次のステップに進ま

せてくれて、ありがとう。

一人目のお姉ちゃんは、

『集中力とあたたかい心であふれさせてくれる糸』

です。勉強で分からない問題があっても答えを見ずにまずは自分で考えてみる、それがお姉ちゃんのスタイルです。よくケンカをするけれど本当は笑顔がすてきで心やさしいお姉ちゃんです。まずは自分で考えてみることに、みんなを幸せな気持ちにさせてくれてありがとう。

二人目のお姉ちゃんは、

『話し上手、聞き上手、やる気スイッチを持ったキラメキフォーユー』

です。ひまなときや分からないことがあったときに聞く相手はお姉ちゃんです。そのほかにもわたしじゃ到底読めない本も、

「読むと思ったら読む。」

と言い本当に全て読んでしまいます。人の話にちゃんと聞く耳を持つこと、時と場にに応じてけじめをつける大切さを考えてくれて、ありがとう。

家族を思いうかべて初めに出てくる言葉は、やさしさです。一人一人のどこかにやさしさがあるとわたしは信じています。なのでわたしにも必ずどこかにやさしさを持っています。そのやさしさを見つけてもらえようになりたいです。そして、アクシデントがあっても家族みんなで乗りこえていきます。

伝統を守り続けたい

つくばみらい市立小張小学校 六年 日下部 朱音くさかべ あか ね

私たちの茨城県には、古くから行われているお祭りがたくさんあります。例をあげると、大洗八朔祭、水戸黄門まつり、石岡のおまつりなどです。

私のふるさとであるつくばみらい市にも綱火という伝統的なお祭りがあります。綱火には、松下流と高岡流という二つの流派があり、私が住む小張地区で行われているのは、松下流綱火です。松下流綱火は、空中に綱を張り、その上でしかけた人形や船を操り、しばいを演じさせ、最後に花火に点火するというものです。毎年八月二十三、二十四日に綱火のお祭りが行われています。

私は、お祭りといえば、大きな花火がたくさん打ち上がる、ただそれだけのものと思っていました。しかし、綱火を見て、綱を使って人形しばいをする、ただ花火を打ち上げるだけではないお祭りがあることを、初めて知りました。と、同時に、今まで思っていたお祭りのイメージがくつがえされ、とてもおどろきました。

私の通っている小張小では、綱火の伝統を守る取り組みが行われています。例えば、五、六年生が綱火の歴史について学び、八月二十三日に行われるくりこみに参加したり、秋祭りで綱繰りをひろうしたりします。

五年生の時、綱繰りを経験しました。私は、「保存会の人の話をよく聞けば、うまくできるだろう。」と思っていました。

でも、やってみると、綱が八本もあってその一本一本をうまく引いたりゆるめたりしないと、人形は正しい方向に動きません。私は、「綱火は簡単なものじゃないんだな。」と強く実感しました。

六年生になり、楽器の演そうにちょうせんしています。綱火では、太こ、つづみ、かねなどいろいろな楽器を使いますが、私は笛のたんとうになりました。私は、母から「綱火の笛は吹くのがむずかしい。」ということを少し聞いていました。でも、「練習すればできるだろう。」と考えていました。しかし、練習してみると、いくらやってもうまく音が鳴らず、くやくてなみだが出ました。そして「綱火はやっぱりむずかしいな。」と改めて感じました。

綱火は「国指定重要無形民俗文化財」に選ばれています。しかし、四百年も伝えられてきた綱火の伝統をこれからもずっとずっと守り、伝えていくのは決して簡単なことではありません。でも、だからこそ、つくばみらい市のほこりである綱火をこれからも続けていく必要があると、私は思います。これからの綱火の発展に少しでもこうけんできるよう、綱火のことをもっと知り、綱火のことをもっと好きになつて、一人でも多くの人に良さを伝えていきたいと思いました。

思い出がいっぱい

龍ヶ崎市立愛宕中学校

一年

大^{おお}木^き

遙^{はるか}

「お姉ちゃん釣れたよー。」

私のふりあげたさおの先には、赤いザリガニがエサの魚肉ソーセージに食いついたままゆれています。むこうで姉も次から次へとザリガニを釣り上げています。さおにしたアサガオの支柱がザリガニの重さでたわんでいます。バケツに振り落として覗いて見ると、たくさんザリガニが重なりあっています。

「もうこのくらいで終わりにしようか。」

姉の声でザリガニ釣りを終わりにしました。こんなにたくさんザリガニは飼えないのでせっかく釣ったものだけ二匹だけ残し、あとは全部放しました。家に持ち帰り共食いしないように容器を別にして、イカをあげました。

私の住んでいる町は龍ヶ崎といって人口七万人の地方都市です。私は町なみから少しはなれた、まわりを田に囲まれた須藤堀町という所に住んでいます。二階の窓から景色を見ると目の前一面に田畑が広がっています。この自然豊かな町で、私はたくさん思い出を作ってきました。ザリガニ釣りも小学校の時にはたくさんしました。小さな頃から、田や畑の間を走りまわり近所の人達ともたくさんお話をしてきました。

私の住んでいる地区は、私の兄弟三人と近くの友達二人の五人しか子どもがいません。なので、ラジオ体操もないし、

子供会もなく少しさみしい気もします。でも、ザリガニを釣ったり、虫採りをしたり、また、広々とした田んぼ道で、風揚げ、テニス、フリスビーまでできます。お年よが多いので、私達子供は、とても大切にされています。

夏の夕方ロン（家で飼っている犬）をつれて散歩に出ます。広い田の上を向こうから風がわたってくるのが見えます。途中同じように犬の散歩をしている人とすれちがいます。「こんにちは」とあいさつすると相手も優しい笑顔で「こんにちは」をかえしてくれます。ほとんどの人が顔見知りで皆優しいです。時々玄関先にじゃがいもやネギが置いてあります。近所の人の、おすそ分けです。作った野菜を食べてほしくて届けてくれたのです。季節の野菜や果物を分け合って食べる習慣が、まだ残っています。

お年よが多いといいましたが、そのために気を付けている事もあります。例えば大きな音をたてたり、大きな声を出したりするのはしないようにしています。冬に派手なイルミネーションをつけるのもひかえています。狭い地域なので、お互いに助け合い、気を配り合って生活する事に、おじいちゃん、おばあちゃんから小さな子供まで努めているのです。

夏休みに家族旅行で他の県に出かけました。そこでパラグライダーを体験しました。きんちようしながらでしたが、高い所から見下ろす眺めは、やみつきになりそうです。右や左に揺れながら広がる緑の景色と、耳の側を音をたてながら流れる風は須藤堀町と同じに感じられました。

今年台風の影響で学校がお休みになった日。台風が去った

後、姉や弟と風揚げをした空。雲がスピードを上げて流れていました。風に乗ってどんどん上っていく風と、色づき始めて稲が波のように揺れていく田んぼと、その間を歓声を上げながら走り回る私達と、なんだかとても大きなものに抱かれているように感じられて、いつまでもこんな時間が続くといいな、と願っていました。

私もいつかは、この地域をはなれる時がくると思います。今、私が周りの人の温かい目に見守られながら、毎日ゆつたりと生活できている幸せに気づくのは、もっと先になるかもしれない。ふるさととは、私にあふれるくらいの思い出を与えてくれました。そして、いつまでも私が戻ってこられる場所であつたらいいと思っています。

茨城の魅力

水戸市立緑岡中学校 一年 長谷川 真由

友達たちと「出身地を聞かれたら何県って答えたい？」と話していた。すると、その多くが、東京や神奈川、北海道など、残念ながら茨城と答える人はいなかった。流行に敏感で、きれいで新しいものを好む傾向にあるため、東京などに憧れをいだく人も多いのだろう。私もその一人だった。

茨城は農業産出額が全国で北海道に次いで第二位ということを知っているだろうか。まさしく農業の盛んな県といえる。しかし今まで私は、農業は大変そうだし、汚れてしまいそうだった、あまり良いイメージがなかった。私の友達

たちも似たような感じだ。そんな茨城県を私達若い世代が胸をはって「出身地は茨城県です」と言えるには農業に対する価値観を変えることだと思う。

先日、ファーストフードの食肉管理が大問題になった。事件があつてから、私は食べ物の産地が分からない物を食べるのが怖くなっている。だから最近これはどこで作られたものなのか知りたくなった。そしてある体験を通して、特に地元食材であつてくれたらうれしいと思うようになった。

ある体験とは、茨城県の農業について勉強会に参加できたことだ。茨城県農業総合センターやジャガイモ生産農家などに見学に行った。その中で最先端の農業技術を知ることができた。例えば、メロンを生産者が育てやすく、消費者がおいしく食べるために品種改良を重ね十年から二十年もかかって新しい品種ができること。中央アジアから病気に強い原種を見つけることから改良をはじめていること。ブドウなども、消費者がより食べやすいように種をなくし甘く栽培しやすい研究を重ね新しい品種を生み出している。そうしてできたシャインマスカットは私の好物だ。私は今まで肉も野菜も果物も出されたものを食べ、おいしいとかおいしくないなどの感想を持つくらいだった。しかし、私達が食卓で簡単に食べる食材一つ一つに多くの人の研究や生産努力があることを知り、ただおいしいと感じるだけではなく、一口一口をかみしめて感謝して食べていこうと思った。

また、ジャガイモ生産農家の方の言葉で印象に残っていることがある。それは、

「農業をやっているとね、五感が研ぎ澄まされるんですよ。」

自然の中で天気を常に観察し、あらゆる現象に対応したり、大地に手を触れ、おいをかぎ、野菜、果物、家畜などあらゆる生物の誕生を喜んだりする。それが五感を研ぎ澄ます力になっていくのかもしれないと、一緒に見学会に参加した母と話し合った。人間にとって生きる上で欠かすことのできない食を支える、農業に携わることこそ人間にとって価値があることなのかもしれないと思えるようになった。農業に対するイメージが自分の中で少し変わった気がした。

ジャガイモ生産農家の方が「今は外国から安いものが入って入ってくるので地元で作りが難しいんです。でもみなさんが茨城のものがほしいといってくれば、地元の農家の人もやる気と勇気がわいてきます」と言っていた。

私たちは学校でもっと農業について勉強できたらいいと思う。近くで作られたものを食べるといふ地産地消の活動が私たち子供にもどんどん広まるために、採れたてのものをすぐに食べられる授業があってもいいと思う。また、運ぶ時の沢山の燃料を消費したことによる二酸化炭素の排出も抑えられ環境にも優しいということも魅力的だ。

私たちは今、学校、部活動、塾など毎日精一杯生きている。機械に触れることも多い。でも、自然に触れ、五感を研ぎ澄ますことも今の私たちに必要なことなのではないだろうか。私は、それを経験しやすい環境である茨城に住んでいることを誇りに思う。

茨城の魅力、全国へ！ 四つの計画

水戸市立第一中学校 二年 小 関 暖 花

茨城県は、魅力のある県ランキングで、まさかのワースト一位です。確かに、ぱあーとした華やかさはないけれど、ワースト一位はさすがにないと思いました。そこで、東洋経済の「住みよさランキング2014」という、全国の市を対象にトップ五十まで決めたランキングを発見しました。魅力のある県ランキングのこともあり、おそろおそろクリックしました。すると、五番目に守谷市、十四番目につくば市、四十三番目に那珂市と、とてもいい結果でした。だから、私は住みやすくていいところもたくさんある茨城の魅力をもっと多くの人々に伝え、認めてもらいたいと思いました。そこで、私は茨城のよさを伝える四つの計画をたてました。

計画その一。様々なツアーを行う。茨城はすごいんです！山もあり、海もある。天子でのりんごがりや笠間での焼きものづくり。つくばでは、宇宙や科学とつながれるし、日本で二番目に大きな湖の霞ヶ浦もあります。牛久の大仏や大洗の水族館。日立の電化製品も有名です。そして、私の住んでいる水戸には日本三大名園の偕楽園もあります。他にも、まだまだあります。自分で書きだしていくうちにびっくりしました。茨城はすごいんだなと。これらの場所のツアーをくむことは、茨城に多くの人々をよぶにも効果的だと思います。

計画その二。茨城の食材を使ったグルメをつくる。皆さん知っていますか。茨城県は多くの農産物や水産物の生産量

が、全国一位なんです！ 鶏卵、メロン、ピーマン、レンコン、ほしいも、みず菜、チンゲンサイ、くり、みつば、さば類、まいわし、えび類、こい。なんと、これ全部一位です!! こんな食に恵まれた県なんて、なかなかないと思いますか。これらの食材を使ったメニューを茨城に住んでいる人々にぼしゅうする。そうすると、住んでいる人にも、県外の人にもどちらにもよさが伝わり、一石二鳥だと思います。それに、私も地元でとれた茨城グルメ食べたいです！

計画その三。茨城の歴史を伝える。茨城は歴史も興味深いのです。とくに、水戸には偕楽園や弘道館などがあります。これは、水戸藩主の徳川斉昭が自ら造園構成を練り、創設したそうです。水戸は、徳川家とも関係が深く、歴史であふれています。私は歴史が好きなので、このような歴史をもっと学びたいです。ちなみに、水戸黄門は何人いるか知っていますか。実は一人ではないのです。こういう情報を伝えることも水戸や茨城に興味をもってもらう第一歩だと私は思います。

計画その四。これまでの計画では、主に茨城の外で茨城をひろめることを中心にしてきました。しかし、それだけでいいのでしょうか。私は、一番大切なことは、私たち自身が心から茨城を愛することだと思います。そのためには、まわりにいる身近な人に「茨城もすごいんだよ。」ということを伝えていく必要があると思います。一人一人の小さな意識で茨城のよさを多くの人々に伝えていきたいです。

私は、茨城の人もそうでない人にも、茨城っていいところだなと感じてもらいたいです。この茨城のよさが少しずつで

も、みんなに伝わっていいなと、改めて思いました。

いばらき農業の未来

かすみがうら市立下稻吉中学校 二年 久松俊介 ひさ まつ しゅん すけ

茨城県内では様々な農作物が作られています。収穫量も多く、とても美味しいことから全国で知られています。僕の住むかすみがうら市もその一つで、栗、れんこん、梨、柿、ぶどう、ブルーベリーなど様々な農作物が作られています。

僕の両親や祖父母は農園を営んでいます。夏は暑く、冬は寒く、本当に重労働です。それに、農作物は台風や霜などによつて、品質の良し悪しや収穫量に大きく左右されてしまいます。やつと収穫時期になっても、動物や鳥などの被害にあっていこともあります。どんなに大変でもこの仕事を続けている理由は「毎年楽しみに待っていてくれる大勢の人達がいるから」と両親や祖父母は言います。

僕は大学卒業後は家業を手伝おうと思っています。「安全で美味しい物を作る」という農業の基本精神は十年後も変わることがなくても、より良い農業を目指すことが大切だと思っています。そのためには、大きく分けて三つの問題をクリアしなくてはいけないと思っています。

一つ目は、消費者のニーズに合わせた品種作りです。例えば、ぶどう作りで代表的なものは巨峰です。甘さも酸味もピカイチでぶどうの王様と呼ばれています。それと同じ位に好まれるのがシャインマスカットです。味も良いのですが皮ご

と食べられることから価格は高くても人気があります。また、栗作りでもポロタンという新品種が都内を中心に注文が絶えません。これは、加熱すると栗の鬼皮と渋皮が、甘栗のようにパカッと外れます。美味しいだけでなく、手軽ということが求められているので、新品種の改発は大切だと思います。

二つ目は、農業の後継者問題です。後継者がいないなど、お年寄りだけで頑張っている農家もあれば、外国からの農業研修生に頼らざるを得ない農家もあれば、農作業代を支払っている農家もあります。若者が農業をしない理由は、重労働に見合った賃金が確保されないことだと思います。本人の努力が第一ですが、行政からの支援も広がっていかば違ってくると思います。

三つめは、天災や何らかの事故で収穫できなかった場合の保障です。天災の場合の保障は一般的でなく十分ではないと思います。また、東日本大震災では原発からの放射能もれでの被害に対して、国からの交付金を実施しましたが、申請の書類作りでさえ困難な農家もあったと思います。僕は、市や県などの単位で、小さな農家も含めて困った際の窓口が多く作られて、誰もが知れたらいいと思います。

僕が考えた三つの問題点と解決策は理想でしかないかもしれませんが。しかし、茨城県内のどの農家にも共通する点が少しはあるという気がします。僕が茨城の農作物の作り手になるのは十年後だと思います。美味しい物作りを同世代の仲間と一緒に始め、いばらき農業の発展に貢献できたらいいなと思います。

Welcome to 茨城

茨城県立並木中等教育学校 二年 柴^{しば} 森^{もり} 詩^し 帆^ほ

「魅力的な観光都市で、京都が世界一になりました。」と、今朝の情報番組で報道されていました。京都は日本人にも外国人にも人気の観光地として有名なのは、私も以前から知っていました。「世界一」に驚きました。なぜそんなに人気になったのでしょうか。キーワードは「体験型観光」で、京都を訪れる外国人に特に人気なものは、舞妓体験やユネスコ無形文化遺産に認定された和食の料理教室などだそうです。もちろん、寺社や古い町並み、歴史的文化遺産の観光も旅の目的の一つですが、「和の心」を自分で実際に体験し、楽しむ外国人も多いようです。そして、その様子をSNSで発信すること、京都に興味を持つ人が増え、新たな外国人観光客が生まれています。茨城県にも京都のようにもっと多くの観光客に来てもらい、良さを知ってほしいと思いました。

昨年、私は学校の文化祭で、自分の住んでいる地域の小美玉市を紹介しました。ツーリストとなつて、施設や農産物、お祭り、取り組んでいる事業をPRしました。小美玉市がどこにあるかすら知らない友達も多かったのですが、魅力を感じてもらえた時は、小美玉市の観光大使になった気分でした。その時と同じように、世界の人々にも茨城県に興味を持ち、楽しんでもらえるようなツアーを私は考えてみました。

まず、訪れる場所は高萩市にある「花貫溪谷」です。大小さまざまな淵と滝が連なっていて、溪谷の自然を存分に楽し

めます。ポイントは約六十メートルの汐見滝吊り橋です。風情ある汐見滝の姿や、小さな淵の間を流れていく花貫川の清流を真上から見下ろすことができます。私が一番おすすめする季節は秋です。写真を切り抜いたような美しい光景が広がっていて、これは世界中の人々にぜひ見てもらいたい景色の一つといえます。華やかなトンネルに一步、足を踏み入れて、真っ赤に染まった木々を間近で楽しんでほしいです。

きつと、自然がつくり出す芸術的な風景を喜んでもらえることでしょう。そろそろお腹も空いてきましたか。昼食には里山に伝承されるつけけんちゃんを味わっていただきます。地元農産物のねぎ、大根、ごぼう、こんにゃくなどを使った茨城県北地域の郷土料理です。使われている「常陸秋そば」は、玄そば最高峰と呼ばれている茨城県が全国に誇れるブランド品種で、香りと味わいが特に優れています。このツアーではそば打ち体験をして、そばの作り方も学んでもらいたいと思います。作務衣を着て、そば打ち職人になった気分をぜひ楽しんで下さい。自分で作ることで「常陸秋そば」をより一層堪能できることでしょう。今、日本食は世界中で注目されているので、きつと外国の方に本場、日本のそばを好きになってもらえるはずですよ。次に、アニメ「ガールズ・パンツァー」の舞台となっている大洗町に訪れて、アニメのシーンと同じ場所へご案内します。代表的なクールジャパンの一つである日本のアニメは、海外にも多くのファンがいることから、喜んでもらえること間違いなしです。ぜひ最後に、日本最古の歴史を持つ高級絹織物の「結城紬」の魅力を感じてもらいたいと思います。室町時代に結城家から幕府へ献上された絹織

物で、現在ではその製作工程が世界に誇るべき日本の技術として認められ、ユネスコ無形文化遺産に登録されています。実際に袖を通して、結城の七福神巡りはいかがでしょう。町巡りをしながら、由緒ある寺社に安置されている七福神を探してみてください。

私が考えたツアーはいかがでしたか。二〇二〇年には東京オリンピックが開催され、日本が世界中の人々に注目されます。茨城県にも多くの外国人観光客に足を運んでいただけたらうれしいです。私も英語を一生懸命勉強して、お待ちしております。

私の食卓と茨城の農業

守谷市立けやき台中学校 三年 中村圭吾

僕の祖父母は農業を営んでいます。畑に行けば、キュウリやトマト、ジャガイモ、柿やイチゴなどたくさん作物が育っています。他にもニワトリを育てて卵をとったり、田んぼでお米を育てたりもしています。僕の家と祖父母の家はすぐ隣にあるので、毎日旬で新鮮な野菜をもらっています。そのためうちの食卓に並ぶほとんどの品は祖父母の家でとれたものなのです。

今年は久しぶりに田植えの手伝いをしました。田植えの準備が始まるとたくさん量の苗が運ばれてきます。今までは、祖父母と業者の方が運んでいましたが、今年は僕と兄弟も手伝って苗運びをしました。苗はとても重く、あんな重い

ものを六十を過ぎた祖父母が運んでいることに驚き、今までお米を食べることしか頭になかったことがとても情けなく感じました。

次に行ったのは、田んぼの雑草抜きです。雑草は、イネに与えるはずの土の栄養をすべて奪いとってしまうので抜かなくてはいいけません。泥はとてもぬかるんでいて歩きづらくかがんで作業するので足腰にとっても負担がかかります。もう歩けないほどでした。この作業が終わると、苗を植え始めます。機械で一定間隔に、どんどん植えていきます。機械がなかった昔はすべて手で植えていたそうです。日本の技術の進化はすごいものだと思います。

それから祖父が、毎日朝と夜に十数箇所の田んぼをまわり、水の調節を行います。毎日怠らずにがんばったからか、今ではきれいな小麦色になり、もうそろそろ収穫の時期です。収穫をすると、そのままカントリーエレベーターに運ばれます。「収穫と同時にコンバインが脱穀を行い、カントリーエレベーターで袋詰めまでしてくれて楽に仕事ですむ。」と祖父は言っていました。お米は袋詰めまで行われた状態で、祖父の家に帰ってきます。これで完成です。祖父のお米はツヤツヤしていて甘いのですが、今年は自分も手伝ったのでより一層おいしいお米が出来上がるのではないかとワクワクしています。

農業というのは、土まみれになるし、疲れるし、絶対やりたくないと思う人もいます。しかし今みんながごく普通に食べているものも農家の方々が一生懸命働いて作ってくれたものです。それなのに好き嫌いで残して捨ててしまう

ことは、農家の方の思いも捨てることになります。一生懸命作った野菜を捨てられる人の気持ちをあなたは分かりますか。食べ物、生産者の方にも感謝を持つことが大切だと田植えを行って感じました。

茨城県は緑がたくさん残っている所も多くまた、農業がさかに行われている県として全国有数の所です。しかし、若い人が働きに出て行ってしまい、農業を営んでいる人が減っているのが現状です。たぶん、この県の中にも、おじいちゃんの家で野菜を育てているという小中学生もたくさんいると思います。少しでも農家の人の仕事を手伝って、農家の方の苦労を知ることが、これから先の未来に茨城の農業を残していく上で大切なことだと思います。

また、今当たり前にお米、野菜が食べられているのは、誰がどこかで一生懸命働いているということを決して忘れないでください。作っている人にその地域に感謝して生活することが大切なのです。

僕も、今まで以上に祖父母の手伝いを行いたいと思います。そしていつか、自分の子供、孫と一緒に、野菜作りに挑戦したいと思います。

このまちの魅力

つくば市立筑波東中学校 三年 猪瀬千夏

私は、小学一年生の夏休みに埼玉県からつくば市に引っ越してきました。私の家は、父の仕事の都合で何度も引っ越し

をしていたので、父の実家があるつくば市に家を建てることにしたのです。

引越してきて初めて思ったことは「筑波山がすごく近い」ということです。それまで住んでいた、さいたま市や千葉県船橋市と比べると自然が多く、友達との遊び方も変わりました。小学校までの距離が長かったということもあって、とんぼを捕まえたり草花を採ったりして、毎日寄り道をしながら帰っていました。特に記憶に残っている遊びは、友達とひみつ基地を作ったことです。家の近くの坂を上っていくと、そこは草むらになっていて私の身長よりも大きな岩が並んでいました。その奥には森があり、冷たくきれいな水が流れています。初めてその場所を見つけた時は、とてもワクワクしました。そこで背の高い草をひもで縛り、ひみつ基地のようにしました。簡単な造りでしたが、その中でみんなでおやつを食べたりおしゃべりをするのが楽しかったです。埼玉から遊びに来た友達をひみつ基地に連れて行ってあげた時はとても喜ばれ、また来たいと話していました。このまちに来る前は、室内で遊ぶことが多かったのですが、自然がいっぱいある中で、どんな遊び方があるのかを自分達で考え、工夫しながら遊んだ事は、とても良い経験になりました。

そしてこのまちには、もう一つの魅力があります。それは、地域の人々とのつながりが強いことです。

三年前に起きた東日本大震災で、私の住むまちは二日間位、電気と水が使えなくなりました。私の家には、保存食がいくつかありましたが、この状態がいつまで続くのか、不安でいっぱいでした。でも、水道水が使えず生活用水に困って

いた時、何軒もの家が近所の人々に井戸水を快く提供してくれました。ガソリンや、灯油、食品なども、長い間不足していたので、入荷の情報を共有したりもしました。たくさん声をかけ合ったりしていたので、地域がひとつになったような感じがして、心強かったです。

また、今年の二月に大雪が降ったときも、地域の人々との強いつながりを見つけました。その日、父は仕事で不在だったので、母と二人で雪かきをすることにしました。外に出る前は自分の家の前だけやれば良いと考えていましたが、外に出てみると、その考えは変わりました。近所の人々は、朝早くから起きて、自分の家の前だけでなく、お年寄りが住んでいる家の前も、あたりまえのように雪かきをしていたからです。その様子を見て、自分の家の前だけやれば良いという私の考えが恥ずかしくなりました。そこで、私も近所の人々の為にといい、二人暮らしのお年寄りの家の前の雪かきもすることにしました。雪かきは、重労働で大変でしたが、きれいになった道路を見たら、疲れもなくなりました。近所の人々と協力しあい、誰が通ってもケガしないような安全な道路にできたということは、あたりまえかもしれないけど、私は誇りに思いました。

その他にも、採れたての野菜を届けてくれたり、犬の散歩を代わりにしてくれたり、たくさんのお世話になっていきます。だから私も、地域の人々の役に立つことは何かを考え、今から行動に移したいと思っています。

そして、このまちの魅力である、「豊かな自然」と「地域のつながり」を、これからも守り続けていきたいです。

竜巻を通して学んだこと

つくば市立筑波東中学校 三年 矢^や口^{ぐち} 伽^か弥^や乃

私の住んでいる北条地区は三年前の二〇一一年、大きな竜巻に襲われました。いつも見ていた風景とはまるで違う周りの景色に、当時中学一年生だった私は驚きを隠せませんでした。私の家も被害にあったため、今まで住んでいたはずの家は全壊でした。変わり果ててしまった自分の家を見たときは、あまりのショックに言葉が出ずただ涙があふれ出して止まりませんでした。

その後、がれきなどの撤去作業があるため祖父と祖母はつくば市が料金を負担してくれる県営のアパートへ、私と母と妹と曾祖父は近くの親戚のところへ行くことになり家族がバラバラに住むことになりました。最初のうちは慣れない生活に戸惑ってばかりの毎日でしたが、何事もなかったかのように接してくださるおじさんとおばさんのおかげで少しずつ普段と変わらない日々を過ごすことができるようになっていきました。でも、ずっと一緒に暮らしてきた祖父と祖母になかなか会えないのでさみしいと思う気持ちは、心の中に少なからずありました。

こうして親戚のところで過ごしているうちに復興が進み、約七ヶ月後には新しく建てかえられた自分の家に戻ることができました。そしてまた、家族六人が一緒に暮らせるようになったのです。

三年という月日がたった今、思い返してみるともちろん辛

かったことも悲しかったこともありましたが、私には支えてくれる人達がたくさんいるんだということを実感することができました。

まず、竜巻があつてからすぐに炊きだしをして無料で食べ物配ってくださったボランティアの方々、家の中などのそうじを手伝ってくださった高校生のみなさん、いつ復興するのか全く分からない状況の中でも嫌な顔ひとつせずに私達を温かく迎え入れてくださった親戚のおじさんとおばさんには感謝してもしきれないほど助けてもらいました。今もとの生活に戻ることができているのも、この方々のおかげなのではないかと思っています。

そして一番はやはり家族です。私の話をどんなときも笑顔で聞いてくれた曾祖父、遠いアパートから毎日来て学校の送り迎えをしてくれた祖父、家の周りの手入れをしたり心配してわざわざ会いに来てくれた祖母、私が不安になってしまったときはいつもそばにいてくれた母、小さいながらも一生懸命私を励まそうとしてくれた妹、私にとっては全員が一人も欠かすことのできない大切な存在です。そう気がつくことができたのも大きな環境の変化があり、離れて暮らすことになったからこそなんだと思います。竜巻は、もう二度と起こってほしくはないけれどこんな貴重な経験をしたおかげで、とても大事なことに気づかされ深く考えることができました。

これから先の未来でもしも、私のふるさとであるこの北条で三年前のようなとても大きな災害が起きてしまったとしたら、私はボランティアとして活動して少しでも地域の方々の

役に立ちたいと心から思いました。そのために、これからも家族を大切にしてお人をお願いする気持ちを忘れず、何事にも取り組んでいきたいと思ひます。

茨城の地、笠間に生まれて

智学館中等教育学校 三年 松山実玖

私は、笠間市に生まれ、育つてきた。家から周りを見渡せば、加波山や吾国山の山並みが遠くに見え風が吹けば眼下で緑のさざ波が押し寄せる。暑い夏の日でも、夜は涼しい風が吹き抜け、天気が良ければ満天の星空が私たちを魅了する。家族で庭に寝そべって星空を見上げる幸せな時間は田舎ならではの楽しみ方だ。東京のような高層ビルや大企業の本社、アイドルが来るような大きなライブ会場などは全くない。でも、私はそんな故郷が好きだ。無理に背伸びなんてしない。私の故郷に、都会みたいな建物はいらぬ。私が欲しいのは、「おかえり」と言ってくれる、変わりのない故郷だ。

私が生まれ育つた笠間は、周りを山で囲まれた盆地で、田や畑があちこちに広がっている。また、秋に大粒の実を実らせる栗は、日本一の生産量を誇っている。栗は、調理の勝手がよく、栗のおこわやモンブランはもちろん、栗のソフトクリームやプリン、タルトやお寿司まである。栗まつりや、小学生による栗を使った料理コンテストなども、毎年積極的に開催しているのだ、多くの市民や県民に親しまれている。

笠間は、鎌倉時代からのとても長い歴史のある土地で、笠

間城の城下町として栄えた。また、それより長い歴史を持つ笠間稲荷神社は、日本三大稲荷の一つで、門前町としても栄える笠間を大きく支えている。私にとっても思ひ出の詰まった大切な場所の一つで、友達と浴衣を着て茅の輪くぐりに行ったり、社会科見学で菊まつりについて、レポートを作ったり、大混雑の中、家族で初詣に行ったりしたことを懐かしく思ひ返すことがある。そんな時、私の成長の過程の中にはあちこちに「笠間」があることを実感せずにはいらぬ。

そして、多くの笠間の魅力の中でも、私が特に誇りに思うのは「笠間焼」だ。私の家のすぐ近くにある「久野陶園」は笠間焼の発祥の地と言われており、長い登り窯が今でも残っている。東日本大震災で被災し、登り窯の一部が壊れてしまったが、ボランティアの人たちの手によって修繕され、大切な文化財となつている。また、笠間は焼き物のコンテストや陶炎まつりなどを盛んに開催している。積極的なPR活動によって、全国でも広く知られていて、県内からはもちろん、県外からも毎年大勢の方が応募、来場してくださる。私も小生の時は毎年コンテストに応募して、今でもその作品がペン立てやお皿などとして大活躍している。昔はそのように、日常生活の中で使うために、色や飾りの少ないかめや湯たんぽなどが作られていた。しかし今は、優れた芸術作品が数多く展示・販売され、笠間を盛り立てる、町おこしの先駆者のような役割を果たしている。私は、かたちを変えながらも今日までも続く伝統ある笠間焼がこれからどのような役割を担うようになるのか、とても楽しみだ。

私が故郷を大好きになれたのは、両親のおかげだ。両親が

ここ、笠間を選んでくれなかったら、私はここまで笠間を愛していなかっただろう。しかし、父の実家は長野県。母は茨城の城里町だ。どちらでもないのに、どうしてここを選んだのか。母に尋ねると、

「なんとなく、ここがiiiって感じたの」

と、何とも言えない、あつさりとした返事だった。多分、「百聞は一見にしかず」という言葉の通り、両親が「小京都」とも呼ばれる笠間の地を訪れ、のんびりとした雰囲気気が気に入ったのだと思う。

やがて私に、大学進学や結婚を機に、大好きな故郷を離れなくてはならない時が訪れるかもしれない。けれど、私の成長を見守りたくさんの思い出が詰まった故郷は、どんなに遠く離れても私が辛い苦しい時にも、まっ先に心のよりどころとなってくれるだろう。

いいところいっぱい茨城県

茨城県立日立第一高等学校附属中学校

三年

鈴^{すず}

木^き

かりん

夏休みのある日、私は部活の帰りに数人の友達と茨城県のことについて話していた。

「茨城のいいところって何だろうね？」

私がなんとなく言うと、そこでみんな黙ってしまった。しかし、しばらくして一人が、

「納豆？」

などと苦笑しながら言うと、それに続いて他の人も茨城のい

いところをぽつりぽつり言い始めた。私はほっとした。茨城県にはいいところがないわけではない。でも、若干の間があったことが気になり、それから私は茨城県のいいところについて色々考えてみた。

茨城県は、生産量が一位、二位を競う野菜や果物がたくさんある。海もあるし、山もある。やさしい人も多く、南部は東京にもそこそ近い。よく、納豆納豆と言われるが、納豆だけではなく、メロンも北海道を抜いて生産量日本一なのだ。ここ数年では、茨城空港や北関東自動車道もでき、県外との繋がりはますます広がるばかりである。土地も多いため最近では大型ショッピングモールもどんどんつくられていく。茨城県はすぐく住みやすい県だ。

それにも関わらず、都道府県魅力度ランキングというものをとると、茨城県は最下位の常連になっている。大好きな茨城県のいいところを分かってももらえないのはとても悲しい。

こんなにもいい県なのに何がいけないのか。

私は考えてみた。「魅力がない」などと言われてしまうのは、きっと他県の人たちが、茨城県を知る機会がないからなのではないだろうか。「魅力がない」のではなく、ただ単に、「茨城県を知らない」日本人が多いだけなのだ。知らない県には魅力も何も評価のしようがない。つまり茨城県はPRが下手なだけということになる。

だから、私は、茨城県はもっと他県に存在をアピールするべきだと思う。そこで本やインターネットなどでアピールの方法を調べてみた。すると、思いもよらず茨城県が最近もうすでに少し奇抜なPRを始めていたことが分かった。イン

ターネットニュースなどによると、「茨城県がグレた」などと書いてあり、笑ってしまった。

知っている人も多いかもしれないが、茨城県出身の人気お笑い芸人が「なめんなよ♡いばらき県」などという啖呵を切るようなキャッチコピーと一緒にポスターに載っているのだ。自虐ネタで面白おかしく茨城県の宣伝をしている。これには他県の人も驚いたらしく、ネット上でちよつとした話題になっていったようだ。「茨城」ではなくひらがなで「いばらき」と書くことで、誤読を避けようとしていることも分かる。茨城県はちゃんとPRを始めていたのだ。

では、私達中学生には何かできる事がないだろうか。考えてみた時に、まず一番大切な事は、「自分の県のいい所を知る」「自分の県に自信を持つ」ことだと思った。茨城県は、アニメの舞台や、ドラマ、映画の撮影にもよく使われている。今話題の可愛いゆるキャラも色々いるし、ご当地アイドルや戦隊もののヒーローもいる。茨城県は頑張っているのだ。しかしそれを県民が知らず、「茨城県のいいところは？」と聞かれて黙り込んでしまうのは、あまりにもつたいないし、寂しいではないか。だから私は、自分の住んでいる茨城県を誇りに思いたい。納豆だって立派な特産物だ。苦笑まじりに「納豆？」というのではなく胸を張って「納豆！」と言いたい。そうすることで、周りの人たちの意識も変わり、次第に県民全体の意識も変わるかもしれない。私は茨城県が大好きだ。こんなにも素敵な茨城県はずっと私の誇りだ。

私のふるさと

茨城県立水海道第一高等学校 一年 菊池和澄きくちわすみ

ザァー。ザァー。私の故郷は、いつも海の心落ち着く音がする。私は、小さいときから、祖父母の住む日立の海が好きだ。そして、日立の町が好きだ。

帰省するとき、私は、いつも家族とうなぎ屋へ行く。そこで、天ぷらや刺身、うなぎを食べて、私はやっと故郷に帰ってきたのだと感じる。近所の人達は、優しく、

「おかえり、また大きくなったね。」

と声をかけてくれるのだ。私は、その温かな声を聞く度に、故郷っていいところだとも思う。家族ではないのに、私の成長を喜んでくれる近所の人達、自分の成人を楽しみにしてくれている曾祖母、天国にいる優しい曾祖父、いつも温かく迎えてくれる祖父母、私は、故郷に帰る度に、たくさん笑顔や幸せをもらい、誰かを大切に思う限りない優しさを知る。

しかし、二〇一一年三月十一日、大きな地震と津波が日本を襲った。その時、私は、小学校の教室で友人と喋りながら帰ろうとしていたときだった。縦揺れの地震が下から突き上げ、小さな縦揺れの地震がだんだんと大きな地震へと変わっていった。立つことが困難になった。周りの友人は、恐怖で泣き叫ぶなか、私は、静かに机の下に隠れ、地震が収まるのを待つしかなかった。地震が収まった。先生が来て、私たちを外へと誘導した。私は、外に出てから、少しだけ安心する

ことができた。ただ、ひたすら怖かった。そして、日立に住む故郷の人達が心配だった。避難しているのか、無事なのか。私は、家に帰り、母と駅へ向かった。公衆電話の前は、友人や家族と連絡をするために並んでいる人達でいっぱいだった。私も、そこへ並んだ。ようやく、自分の番が来たとき、どきどきしてたまらなくなつてボタンを押した。電話がつながり、いつもの祖父の声が聞こえた。

「こっちは、大丈夫だよ。」

その一言で、私の心は、大きな安堵感でいっぱいになった。しかし、私が、中学一年生の夏休みに日立に帰ったとき、いつも見ていた風景とは違う景色がそこにはあった。間違はなく、故郷であるけれど、綺麗な海岸も趣ある町並みも壊されていた。そこで、私は、初めて地震と津波の恐ろしさを知ったのだ。海岸の崖がえぐり取られ、船が陸に乗り上げていた。私には、その光景が信じられなかった。穏やかで、ゆっくりと時間が流れていた町が変わってしまった。大好きな海が恐ろしい波で故郷を飲み込んでしまったのだ。津波が襲ってきたときの町は、どんな光景だったのだろうか。想像するだけで、恐ろしくなった。悲しくて、悲しくてたまらなかった。今まで、当たり前に、そこにあつたものを、突然失う。私は、当たり前にあるものこそ、とても大切で、そこからもらう幸せを忘れてはいけないのだと知った。

あれから、三年が経った。この三年間は、前を向くための三年間だ。故郷の日立にも穏やかに流れる時間が戻った。岩手、宮城、福島、茨城に住む人達は、心に深く消えない傷を負いながらも、前を向いて生きている。辛い経験を乗り越え

て人は、さらに強くなる。強くなるための三年間だったから、人々は、前を向いて生きているのだと思う。

だから、私は、私の為すべきことを、故郷のためにしていきたい。私をいつでも温かく迎えてくれた人達のために、私にたくさん笑顔と幸せをくれた人達のために。そして、未来の茨城を担い、守っていく者として、私は、成長するのだ。もっともつと強い人間になって、故郷のために私ができることの限りを尽くす。

祈っているだけでは、復興は進まない。自ら、復興の中心となるのだ。大好きな故郷のために。

私は、茨城の元気の源になる。私を育ててくれた家族、祖父母、私を見守ってくれている故郷の人達、私に大事なことを教えてくれた大好きな海のために、私は強くなる。

私たちの周りには

茨城県立下妻第一高等学校 一年

内田悠介

カリカリカリ、ポリポリポリ。我が家で飼っている犬「マーブル」が散歩から帰ってきて、元氣よくご飯を食べている音が聞こえてきた。時計の針は、朝の五時を指していた。いつものことで、この時にはあまり何も考えずに、再び寝に入ってしまった。

しかし、数日後、両親からあることが告げられた。それは、私の祖父母が今年で結婚五十周年を迎え、私の母と祖父母で北海道に三日間、旅行に行くというものだった。私の父は仕

事でいつも忙しく、家にいる時間も少ない。となると、この三日間は、残された子供三人だけで、生活しなければならぬ時間がほとんどになる。そこで、祖父母たちが旅行に行く前日に、家族みんなで集まり、三日間のやることリストを作成した。掃除や洗濯などを、事細かに記載していった。そして、その中には「マーブルの散歩」という項目があった。

「じゃあ、散歩は悠介の担当ね。」

母から言われたとき、私は少し不安になった。散歩は一日二回、早朝と夕方に行っていて、祖父はマーブルの散歩のために、早朝の四時半に起きているからだ。夏休みに入り、生活のリズムが崩れていた私は、憂鬱な気分のまま、一日目の朝を迎えた。

風が心地よく、清々しい朝だった。私とマーブルは、早朝散歩に出かけた。朝の四時台だったため、鳥の鳴き声だけしか聞こえないほど、静かだった。しかし、ラジオを聴きながら散歩しているお年寄りの人も多く、何度か声をかけられた。昨日の夜に考えていた憂鬱な気分とは逆に、とても清々しい気分になっていた。散歩から帰ってくると、マーブルにご飯を与え、おいしそうに食べる姿をしばらく眺めていた。

日が傾き始めた頃、私たちは二回目の散歩に出かけた。その途中、あるお年寄りの女性に声をかけられた。

「福島さんのお孫さんですか。」

私は突然のことに驚いて、少し返事が遅れてしまった。話を聞くと、普段は祖父が来ていたが、今日は違っていたので、祖父に何かあったのかと心配したようだ。犬が似ていたため、声をかけたという。私は心の温かさを感じた。私たちの

周りには、私たちを気遣ってくれる人がいることに、改めて気付いた。それが見知らぬ人でも、同じことだ。

二日目の朝、早朝にも関わらず、その女性が花に水をやっていて。四時半頃にも散歩をしていることを話したため、朝早く起きたという。昨日よりも会話が進み、とても楽しい時間を過ごした。

三日目、今日は祖父母が帰ってくる日だと言うと、その女性には少し悲しそうな顔をした。私は、これからは私も祖父と一緒に来ることを約束した。女性に笑顔が戻った。

私の何気無い日々が変化した。地域の優しさに触れて、充実した毎日だ。私たちの周りには顔見知りの人たちだけではなく、見知らぬ人でも、気遣い、心配してくれる人がいる。このような人が身近にいることは、素晴らしいことだと思うし、私たちの地域の誇れるところだ。地域とのつながりが、いかに大切で、人生を楽しく、よりよいものにするかを、再確認することができた。あなたも、地域とのつながりについて、考えてみてはどうですか。

私の食卓と茨城の農業

茨城県立水戸第三高等学校 一年 萩谷友貴

私が毎日食べているお米は茨城のお米です。そのお米は私の祖父がつくっているお米です。そのお米は中学生のときに食べていた給食のお米やお店で買ったお弁当などのお米よりおいしいです。毎年、秋や冬に祖父の家を訪ねると必ず大き

な袋に入ったその年に収穫したお米（新米）をもらいます。新米はさらにおいしく、私の家では他の家族に分けたりしています。私の祖父のお米は自慢のお米です。

私は、一回稲刈りを手伝ったことがあります。祖父はとても広大な面積でお米を栽培しています。稲刈りは機械で行っていますが、それでも働き手が足りず、いつも何人かで稲刈りをしているそうです。私はその中で鎌を使って稲刈りを手伝いました。すると、なかなか稲は切れず力が入りません。こんなに広い田んぼを管理している祖父は大変だろうな。すごいな。と驚かされ、感心しました。その日から私はお米を食べるとき、祖父とお米の命に感謝の気持ちをちゃんと込めて「いただきます」を言うようにして、意識して食べるようにしています。意識して食べるとよりおいしく感じられ、ついついおかわりをするくらい食べてしまいます。冬にはそのお米を使った餅をつくってくれます。餅はその祖父のいいお米からつくるのでおいしく私は大好きです。茨城はお米のいいところと私は自慢できます。

その他に祖母は野菜を育てています。その中でも一番はスイカです。夏には大きいスイカをもらえます。私の家族は何日もかけて食べます。甘くて果汁がたくさんでとてもおいしいです。他にもナスやきゅうり、ピーマンなどももらいます。ナスやピーマンはカレーに入れて夏野菜カレーとしています。

また、スーパーで野菜や肉を買うとき、私の家ではなるべく地産地消のものを買うようにしています。県外の野菜や肉もおいしいですが、やはり茨城の農産物が一番おいしいと思います。

います。

その理由は、「うまいもんどころ」という安心で高品質な茨城の食をPRするというプロジェクトがあるからです。そのうえ、農業人口が全国一位、耕地面積全国二位、れんこん、栗、メロン、白菜、ピーマンの収穫量全国一位、さつまいもが鹿児島県に次いで全国二位という驚愕の数字で農業のことには自信があり、農業の活動が活発です。このような農業大国と言われるすばらしい茨城を誇りに思います。五つの農産物の収穫量全国一位というのはすごいと思います。なのに、茨城に住んでいるのに茨城の野菜を買わない人はこんなにくさんのおいしい茨城の野菜を食べないということなので、非常に残念です。もしも茨城に住んでいるのに茨城の野菜を食べないという惜しい人にはぜひ茨城の野菜を買って食べてもらいたいのです。

そして、食べるときの「いただきます」には、よく食べ物の命に感謝し、料理を作ってくれた人に感謝の意味を表すと言いますが、その食べ物を作ってくれている人にも感謝をしないといけないと思います。

私には恥ずかしいのですが、苦手な野菜や果物がたくさんあります。ですがみんなと一緒だったり、私の祖母や自分が育てた野菜、果物、地元産（茨城県産）の野菜や果物だと思議と食べられることがあります。この体験を生かして、地産地消の農産物を使った食事で楽しく食べ物の好き嫌いがなくなればいいなと思います。

私は小学生のときに、出前授業で地産地消の野菜をたくさん使った料理を作りました。食べるとき、正直私は食べた

ないとか嫌な野菜が入っていて嫌だなど思っていました。が食べてみるとおいしく、みんなと一緒に食べていたので気付くと完食していました。

このように食べ物の好き嫌いをなくしてたくさんの野菜や果物が食べられるように努力をしています。すべての食べ物や料理がおいしく感じられるようにしたいと思うからです。

私は食事のときにだされるパセリが九割残されていることを知りました。パセリを作っている人は「おいしく作ったんですけどね。」とコメントしている悲しい記事をテレビで見ました。その日から私はパセリを食べるようにしています。

そして私はなるべくだされた食事は残さず全部食べられるようにしています。せっかく私たちのために犠牲になつてくれた食べ物の命がもつたいたなく、一生懸命食べ物育ててくれた人、料理を作ってくれた人、食事に関わってくれた全ての人に失礼だと思うからです。

私の理想の食卓は、家族全員がそろって茨城の農産物をたくさん使ったおいしい料理を囲んで食事が楽しむ場・時になることです。

大好きいばらき総文2014

茨城県立水海道第一高等学校 二年 本橋 京香

私は、いばらきが大好きです。その理由は、誇りを感じる、魅力的なところだからです。

私は、ここ茨城県で行われた、第三十八回全国高等学校総合文化祭「いばらき総文2014」に実行委員として参加しました。テーマが「創造の花を咲かせよ 聳える筑波嶺 吹きぬける文化の風」ということで、茨城県の代表である「筑波嶺」と、高校生らしい爽やかな「文化の風」を吹かせ、今大会のマスコットキャラクターである「ふれあちゃん」と共に全国の高校生を、心を込めて、いばらきらしいおもてなしをし、いばらきの魅力を全国へと発信しました。

私が参加したのは、水戸市にある県近代美術館で行われた美術・工芸部門です。その中でも、二十七日に行われたワークショップ「西ノ内和紙で水府提灯を飾ろう」という交流会を担当しました。水戸はかつて水府と呼ばれており、提灯作りが盛んに行われていたことと、県北部の山方地区では西ノ内和紙という和紙作りが行われており、この二つを取り上げました。これは、全国から集まった十名程の高校生を、茨城県の高校生一人がリーダーとしてまとめ、サポートし、各クラスで提灯作りをするという交流会です。

私達リーダーは、本番までに何度も何度もリハーサルを重ね、全国の高校生のために、最高のおもてなしを用意しました。同じくリーダーを務める茨城県内の高校生とは皆初対面でしたが、練習を重ねるうちにだんだんと打ち解け、交流を深めることができました。そしてなにより、同校の部活仲間との仲が深まり、より一層の信頼関係を築くことができました。そして仲間と、自分達なりの意見を言い合い、微調整を繰り返し、よりよいおもてなしのために、切磋琢磨しました。本番の直前は、幾度ものリハーサルのおかげか、あまり実感

がわかず、さほど緊張感もなく、これから始まるのかと、ワクワクとした気持ちでいました。しかし、いざ参加者である全国の高校生が会場へ入ってきた時には、見知らぬ顔ばかりで、さすがに緊張してきて、うまくリーダーとして進行役が務まるかと、心配になってきました。

そしていざ本番が始まると、時間はあっという間に過ぎていきました。第一部では、全国の高校生同士も、初対面であるので、リーダーである自分が、話のきつかけとなるように務めました。しかし、あまり話のきつかけとなるような声かけができなかったことが反省点です。恥や照れがでてしまいました。また、参加者の方々が心地よく交流ができるように、笑顔で迎えることと、挨拶を元氣よくすることを、心がけました。提灯の作り方は、シナリオ通りに、スムーズに行うことができました。わからないところがある人や、困っている人に対し、なるべくわかりやすいように、実際に手本を見せて、優しく笑顔で接するようにしました。そうして、和やかな雰囲気のまま、制作時間は過ぎていき、各参加者の提灯は完成しました。さすが、全国から選ばれた美術部員だけあって、個性あふれる作品は、和紙の雰囲気も相まってか、どれもとても素晴らしい提灯ばかりでした。

全国の見知らぬ人と交流をするなんて、今までしたことがなく、初めての経験でした。本番はとても緊張しましたが、今までの努力を全て出し切り、最高のおもてなしができたと思います。

今回の体験を通し、いばらきの代表として全国の高校生と接したことで、よりいばらきに誇りを感じました。やっぱり

私は、いばらきが大好きです。

我が町、我がふるさと

茨城県立下妻第一高等学校 二年 勝^{かつ}田^た華菜子^{かなこ}

今年の七月二十七日から三十一日にかけて、文化部のインターハイとも言える、全国高等学校総合文化祭が、この茨城県で開催された。私は、文芸部に所属しているため、縁あって四十七年に一度の開催県のスタッフとしてこの文化祭に参加することができた。全国の高校生が参加するということ、どのような作品に出会えるのだろうかと期待していた反面、自分に与えられた役割をきちんとこなせるだろうかという不安もあった。しかし、スタッフ同士の協力によって思った以上のものをつくり上げることができた。普段、文化部は他校と交流する機会がほとんどない。そのため、今回の文化祭で、他校のスタッフと活動を共にしたことを新鮮に感じ、また、これからの創作活動において、とても良い刺激になった。

ここで、私がこの文化祭で担当した仕事の中で、特に印象に残ったものがある。それは、文芸部門の俳句の分科会だ。この分科会では、前日に行われた文学散歩を通して、茨城についての俳句を詠み合った。文芸散歩とは、全国から集まった高校生に、茨城の魅力を紹介するツアーである。詠まれた俳句には、文学散歩ならではの作品が多くみられた。

私は、スタッフとして会の運営にあたっていたため、俳句

は詠まなかったが、ひとつ、気が付いたことがある。それは、茨城が歴史のある、豊かな自然に恵まれた地であることだ。

そんなことは誰にだって分かる、と言う人もいるかもしれない。しかし、生活していると案外気付かないものなのだ。山があり、川が流れ、青空が広がっている。生まれた時から見ている風景は私たちにとって、何の変哲もない『あたりまえ』だった。では、他県から見た茨城はどうだろうか。分科会で詠まれた俳句には、私たちが気付かない、茨城の魅力が込められていた。確かにそうだと思うものよりも、新しい発見をしたものの方が多かったことは言うまでもない。私は、これを機に、自分のふるさについて、見つめ直してみた。

私の家は、山の麓にある。部屋からは雄大な筑波山が見える。春には桜、夏には新緑、秋には紅葉、冬には雪化粧と四季折々の姿で聳えている。朝には、山々の稜線から昇る太陽と、国鳥である雉の声が美しい。平野に広がる田んぼは風が吹くとさわさわと音を立て、まるで海のように見える。小さい頃、姉や近所の子とよく探検しに行ったものだ。

町中に行くと、古い町並みが目を惹く。城下町だったため、道路は基盤の目のように通っている。多くの倉が残っており、文化財に登録されている建物が幾つもある。三年前の震災で、その大部分が被害を受けた。しかし、町の人々の尽力により、元の姿に戻りつつある。修理中の青いビニールシートが外されていくたびに、町の人々の結び付きの強さを感じる。

また、人々も温かい。学校からの帰り道、「こんにちは」と挨拶をする「おかえり」と返してくれる。私はこの時、

素直に、いい町だな、と思う。町全体に見守られているようで、居心地がよく、安心する。

人も町もとて温かい場所だ。

さて、町と言えば忘れてはいけないのが祭りである。

春先の雛祭りには、全国から沢山の人々が訪れる。中学生の時に、雛祭りボランティアといって、町角に立って道案内をした。案内をして、「ありがとう」と言われて、とても清々しい気持ちになった。人との関わり合いを感じる事ができる行事である。

七月末には、夏祭りが行われる。初日の夕方に、山の上の神社から御輿が下りて来る。私の家の前を通るため、毎年ベランダに出て眺めている。御輿が通る時に鳴らす太鼓の音に、私は夏を感じる。次の日の夜から町中が一気に賑やかになる。いつもの静かな雰囲気とは打って変わって、山車が暴れ回り、どこからともなく祭囃子が聞こえる。普段なかなか会うことのできない友達と出掛ければ、すぐに一緒にいた頃に戻ることが出来る。偶然すれ違い、思わぬ再会に喜び合うこともある。懐かしく、どこか不思議な時間を過ごすことができる、子どもも大人も毎年楽しみにしている祭りだ。私は、この行事があることによって、町が活気付いているように思う。

今、改めて生まれ育った町を見つめ直してみると、伝統と人々の温かさの詰まった場所だと思った。今まであたりまえだと思っていたことが、すべて温かく、大切に感じる。十年後も、二十年後も、きっと今感じていることは変わらないだろう。これが、ふるさとを思う気持ちなのかもしれない。

部屋の窓から見える筑波山が、何だか今日は一段と大きく見えた気がした。

総文祭に参加して

茨城県立水戸第三高等学校 二年 畑 はた 中 なか 優 ゆう 美 み

私は、今年の夏、第三十八回全国高等学校総合文化祭、いばらき総文二〇一四の書道部門のスタッフとして全国の高校生の皆さんと関わらせていただきました。

私は、書道部に所属していて、全国の高校生をおもてなしする交流会の係になっていました。昨年の冬から当日までの間に打ち合わせを何度も行い本番を迎えました。

交流会というのは、作品が全国展に選ばれた全国の高校生に「印籠に蒔絵」と「和綴本に寄せ書き」を体験してもらうのですが、私は事前に体験をしてみても、どちらも初めてやることばかりだったのでとても難しくて、これを他県の高校生のみなさんに自分がやり方を教えると思うと不安で仕方ありませんでした。事前打ち合わせの時に進行表の紙が配られ、当日失敗しないように部活の仲間と何度も繰り返し確認をしました。リハーサルを本番の約三週間前に行ったのですが失敗してしまうことや何をやるか忘れてしまったりすることが多々あったので、家に帰ってからもう一度確認をしました。少しでも失敗を少なくしようと一生懸命でした。

そして迎えた本番当日、私たち交流会の係の生徒たちは朝早くから使う道具の準備や最終リハーサルを行いました。

立って説明する所や印籠と和綴本制作の手順を見直しました。前日に配られた総文祭スタッフの赤いTシャツを着てドキドキしながら昼食をとりました。

そして、いよいよ交流会本番の時間になりました。全国の高校生だけでなく、引率者の先生方やカメラも持っている人たちで会場が埋め尽くされました。私の班の高校生は、北海道、長野県、奈良県、千葉県、福岡県の方たちで、全員一ツ年上の三年生でした。私は昔から人前で話すのが苦手で、いつも緊張して早口になってしまったりするので、今回は注意して頑張ろうと思いました。交流会のリハーサルの時にも先生方が、係の人が笑顔でやれば班の子たちも緊張が解けるよと言っていたのを思い出しました。本番が始まるまでも来てくださった班の高校生に積極的に話しかけたり、笑顔で対応したりしました。私以外の班の高校生たちもそれぞれ会話をしていたすぐに仲良くなっていました。自己紹介の時に、作品集で自分の作品を示し制作意図や苦労したことを言っていたのですが、皆さんの選ばれた作品がとても迫力があって素晴らしいものばかりだったので感動しました。毎日練習したとか何百枚も練習したとお話を聞き、その作品に対する思いが強いんだなと感じました。私も納得のいく作品がいくつか書けるようになりたいと思いました。印籠に蒔絵と和綴本に寄せ書きの制作も皆さん初めてなのにもかかわらず、素晴らしい文字を書いていて流石だなと思いました。和綴本には、自分の県の方言を書いてくれた方がいて私にとっても記念になりました。制作が終わった後は、水戸一高さんによる水戸黄門の劇があり大成功でした。帰り際にみんな

記念撮影をしたりしてお別れするのが辛いと感じるほど、皆さんと仲良くなりました。でも皆さんが笑顔でお帰りになられたので、係をしていた私たち茨城県の高校生も嬉しく思いました。最初は少し嫌だなと思っていたこの交流会の係も終わってからではやらせていただいて本当に良かったと思えました。総文祭を茨城県でやるということ自体何十年に一回ということだったので、高校二年生でそのような貴重な体験ができて一生の思い出になりました。

この総文祭を通して、私は茨城県が良い県だという事が改めて分かりました。

この総文祭の時に配られたお弁当の中に茨城県で作られた食材が入っていました。とてもおいしくて、地産地消もできて良かったです。あのお弁当の味は忘れません。

他にも茨城県の良い所を見つけることができました。他県の方たちから見ると、茨城県は田畑が多いと言われました。確かに、私も毎朝電車から見る景色は田畑ばかりですがそれは、茨城県で生産する野菜などの農産物が多いからなので誇りをもって良いのではないかと思います。

今回、総文祭をこの茨城で行って、少しでも茨城に興味をもっていただけたり、魅力を感じていただけていたら嬉しいです。

茨城で総文祭が開催されたこと、総文祭に関わらせていただいたり、それを支えてくださった先生方や会場を貸していただいたホテルの方、交流会に参加してくださった高校生の皆さん、会場に駆けつけてくれたふれあちゃんなど、すべての事に感謝します。

私は総文祭を通して、人々と関わるには笑顔が大切だと分かりました。この体験を通して将来何かに役立てられたらと思います。

茨城の魅力

茨城県立中央高等学校 二年 大塚真希

私は茨城が大好きです。茨城には魅力がたくさんあります。私が思う茨城の魅力を紹介します。

自然が多く、見渡す限り田んぼというところも少なくありません。とても空気が澄んでいて、外を歩いていると心がおだやかになった感じがして、とても落ち着きます。虫の鳴き声もよく聞こえてきます。私の家の近くも田んぼが多く、たくさん緑に囲まれています。そこを散歩するととてもリラックスできます。私も気分転換したい時はよく散歩に出かけています。

元気なお年寄りが多いことも、私にとっては魅力の一つです。外に出るとよく散歩しているおじいちゃんおばあちゃんに会います。自然が多く、落ち着くのでお年寄りも過ごしやすと思います。私は、茨城で暮らしていると、長生きできる気がします。私の祖父母もこの自然に囲まれていきいきと生活しているので、きっと長生きしてくれます。

また、茨城のおいしい食べ物も魅力的です。祖父は庭でたくさんのお野菜を育てています。ねぎやきゅうりやなすなどです。最近トマトとすいかが採れて、これらを料理してた

くさん食べさせてくれます。自家製無農薬なので安心して食べることが出来ます。採れたてを食べられるのでとてもおいしいです。祖父に限らず、農業をやっている人が多いのでこれも魅力だと思います。

さらに、茨城にはたくさん楽しい行事があります。水戸や土浦など各地で行われる花火大会、たくさんの人が見に行きます。とてもきれいで楽しい一時を過ごすことが出来ます。

これは、茨城県以外の人に来てでも楽しめます。他にも、各地で伝統的な祭礼が行われます。近くでは石岡のお祭りがあります。このお祭りには、小学生の頃から毎年足を運んでいます。駅を出るとすぐ屋台が並んでいます。屋台の数はとても多くて種類もたくさんあり、楽しむことができます。見物客も多くとても盛り上がりがあります。以前は石岡の人達が参加して楽しむお祭りだったようですが、今は観光化を図り、見せる工夫をしていると聞いています。これはこれからの地方都市の一つの在り方を示しているのかもしれない。

私は、高校を卒業したら大学へ進む予定です。そして、大学を卒業したら就職すると思います。行きたい大学はまだ決まっていません。東京の大学のオープンキャンパスに行ったので、もしかしたら茨城県を出ることになるかもしれない。就職のときも、茨城県を出るかもしれません。生まれてからこれまでずっと茨城県で過ごしてきました。考え方は人それぞれで、早くここを出たいと思う人もいれば、ここに残りたいと思う人もいます。私は茨城県に残りたいという考えです。大人になっても、おばあちゃんになっても、豊かな自然に囲まれておだやかな土地で暮らしていきたいです。

もし茨城県を出て、他の場所で暮らすことになったとしても、頻繁に茨城県に帰ってくると思います。みなさんは自分が過ごしてきた場所をそんな風に思えるでしょうか。もし思えたとしたら、とても素敵なことだと思います。思えたとしたら、とても素敵な場所なのだと思います。私は、茨城県に生まれて十数年を過ごしたただけですが、このように思えてとても幸せです。

このように私達県民にとっては満足できる土地なのに、全国的には茨城県の魅力はまだまだ伝わっていないと思います。他県の人に茨城県の魅力を伝えるためには、一度足を運んでもらうのが一番ですが、その機会がありません。そのためにも、他県の人を楽しむことができる魅力的な観光地やイベントを増やすことができると思います。また、来県者が増えると、県民では気づかなかったことについて様々な指摘を受けることがあります。そこには改善すべき点もたくさんあるでしょう。逆に私達が気づいていない茨城の魅力も教えてくれるかもしれません。茨城県のさらに魅力的な県にするためには、魅力作りが必要なのかもしれません。私は魅力の発掘をすべきだと思います。私自身も今よりもっと茨城県に目を向けて、他県の人達と交流していく中で、茨城の魅力を再発見していけたらと思います。

茨城自慢

茨城県立中央高等学校 二年

照^{てる}山^{やま}華^{はな}子^こ

私は茨城県内で行われるイベントで、全国に自慢したいものがひとつあります。それはROCK IN JAPAN FESTIVALです。通称ロックインと呼ばれる大規模な音楽祭で、毎年八月にひたちなか市の国営ひたち海浜公園で行われます。なぜ私がこのロックインを全国に自慢したいのかというと、このロックインを目当てに来県する人の数が尋常ではないからです。今年は八月二日と三日、九日と十日の二週にわたる四日間で開催され、二十万人を超える人が集まりました。もちろん私もその中のひとりです。

当日の朝、常磐線下りの電車内はロックインに行く人であふれ返っていました。そしてホームの電光掲示板の文字がいつもの勝田行きではなくロックイン急行に変えられていました。それを見た人たちはたったそれだけの事でとても盛り上がり、そして私は感動を覚えました。人を迎えるための少しの気遣いの大切さをこんなところで学びました。

そしていよいよロックインのステージが始まるとたくさんの出演者がしきりに「ひたちなか最高!! 茨城最高!!」と叫んでいました。それに対して、観客も大いに盛り上がり、県民である私はとても嬉しい気持ちになりました。

こうして郷土愛を感じながら、一日中音楽を楽しんでいましたが、中でも印象に残っているのは帰りのバスのことです。ステージが終わり大勢の人が一気に勝田駅や水戸駅に向

かうバスに乗るのですが、そのバスに乗るまでの長蛇の列の動きがとてもスムーズだったのです。炎天下の中、丸一日ほとんど立ちっぱなしだった観客は誰も疲れ果てていたのですが、バスが休む間もなく次々とやってきたので、三十分ほどでバスに乗ることができました。そのスムーズさにたくさんの人が「I交通はすごい」と声を挙げていました。私は普段ほとんどバスを利用しませんが、ここでも自分がほめられているかのように誇らしく思えました。

このようにロックインは茨城の素晴らしさを発信するよい機会でしたが、さらにアピールするにはどうしたら良いか考えてみました。それは食についてです。茨城は豊かな自然に恵まれています。そこで育った野菜などはとてもおいしいです。それらの野菜をふんだんに使った料理を作って来場者に提供すればさらによいのではないかと思いました。ロックインは真夏に行われます。そんな時に丸一日大暴れしていたら、体力は消耗し、熱中症になってしまいます。そんな時こそ茨城の新鮮でおいしい野菜や肉をたっぷり使った料理を食べれば栄養補給ができます。もしかしたらそのような料理が今年も提供されていたのかもしれませんが、広大な会場で私は気がつきませんでした。もし、そのような所があったら、私は絶対に利用していたと思います。茨城を全国にアピールするよい機会なので、会場に複数のブースを作って茨城の料理をたくさん出して欲しいと思います。

そしてもうひとつ多くの来場者を迎えるのに必要だと思うことがあります。それは宿泊施設を充実させるということです。ロックインは日本全国からはもちろん、外国の人々もたく

さんやつてきます。私のように茨城に住んでいれば問題ありませんし、無理をすれば、東京に戻ることも可能ですが、茨城に泊まってもらえるようにしたいのです。その時必要な宿ですが、茨城には宿が少なく、この期間は予約ですぐにうまってしまうそうです。私もなかなか宿が手配できず、困っている人をたくさん見かけました。どうしても宿が見つからないのでマンガ喫茶で一泊すると言っている人も見かけました。施設を増やすことは簡単なことではありませんが、ロッキン以外の期間にも多くの来県者を迎えられるようにイベントを開発すれば自然に観光地やホテルも増えていくのではないのでしょうか。そうすれば茨城はもっともといきいきとした活気のある県になっていくと思います。本当にロッキンの時だけでなく一年中観光客であふれる町になってほしいです。観光やイベントをきっかけに本県を訪れた人々が自然や私達の生活に触れ、別の魅力を発見してもらえたら良いと思います。そして茨城を好きになって、再び「茨城最高!!」と叫んでもらいたいです。そのためにも、私も今以上に茨城の今に目を向けて生活して身近なところで何かできることはないかと考えていきたいです。

